
むし

ハンマーヘッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

むし

【Nコード】

N7968I

【作者名】

ハンマーヘッド

【あらすじ】

あるドキュン・ママ（あるいはモンスター・ママ）に降りかかった恐怖の出来事です。最初は一匹だった虫が、どんどん数を増していつて、ついには……みたいな感じです。コワイというより、キモチ悪いです。ただ、ある意味、主人公の方が虫よりホラーです。男性には想像もつかない女社会の裏事情というものを、ぜひご堪能ください（笑）

むし1

むし

午前5時、シンクに向って洗い物をしていた手が止まる。

「イヤだわ……」

鏡のように磨きこまれた銀色のステンレスの表面を、這うようにして

移動していたのは一匹のウジ虫だった。

「どうして？ ちゃんと掃除してるのに」

洗い物をする手を止め、顔を歪ませた彼女は少し離れた位置からウジ

虫を眺める。白い小さな体を曲げたり、伸ばしたりしてシンクを移動し

ていくウジ虫。目的地は、どうやら彼女が洗ったばかりの三角コーナー

であるらしい。

「気持ち悪いわね。どうしよう……」

実は彼女、典型的な虫嫌いだ。カブトムシやクワガタなど、小学生の

男子に人気がある虫は、見る分には何とか大丈夫だ。しかし、ウジ虫や

イモ虫、青虫や毛虫といったものは、そこに存在していると思っただけ

で体中が痒くなるような錯覚に襲われる。

「排水溝に流そうかしら」

平日の朝。時計の針は刻一刻と家族の起床時間に迫っていく。いつま

でもウジ虫を眺めている暇はない。

「早く、早く、早く行きなさいよ」

水をかければ流せる位置に、少しでも早くウジ虫が辿り着いてくれる

ように、彼女はひたすらエールを送る。

「もう、早くしてよ」

洗い物はまだ終わっていない。6時までには洗濯物を干し、家族の朝

食も準備しなければならない。ついでに、今日は燃えるゴミの日だ。
い

つもより早く出勤しなければ遅刻してしまう。

「ああ、もう！」

彼女の願いは届かず、ウジ虫はシンクを半分ほど進んだところで
歩み

を止めた。どうやら疲れてしまったらしい。しばらく待ってみたが、
進

み出す気配はなかった。てっきり死んだのかと期待したが、近づい
て確

認すると頭の先の方だけチョロチョロと動いていた。まるで匂いを
嗅い

でいるかのように、小刻みに上下を繰り返す小さな頭。犬や猫のよ
うに

目も鼻も無ければ口もない。愛らしさなど微塵も感じないその顔は、
見

ているだけで嫌悪感を誘った。

「時間が無いのに……」

時計とシンクを交互に見やる時間が長くなる。ウジ虫が止まっている

分だけ、時計の針は進んで行く。意を決して、彼女はダイニング・テー

ブルの上に常備してあるティッシュを手を取った。薄い紙を10枚ほど

箱から引き出し、万が一にも潰れたウジ虫が自分の手に触れることがな

いように、十分な厚みを持たせる。その上で、彼女はシンクに歩み寄っ

た。

「なんでウチにウジ虫なんて出るのよ」

小さく毒づいて、彼女は素早くウジ虫をティッシュに包み、指先で思

い切り潰した。そのまま、ティッシュを指定のゴミ袋の中に放り投

げる。蛇口をひねって水を出し、食器洗い洗剤を手にはち撒けた。手の平

指の間、手の甲、爪の間、手首まで念入りに洗う。それでも気が済まず、

彼女はインフルエンザ対策のために買っておいだ揮発性の消毒液を、
ま

んべんなく手にすり込んだ。

「もう、最悪の一日だわ」

時計を見れば、予定時刻よりも15分ほど遅れている。この調子
では

洗濯物を干す時間は無さそうだ。ウジ虫のおかげで、予定が狂った。
そ

う思うと、腹が立つ。苛立ちを汚れた皿にぶつけるように、彼女は
音高

く洗い物を再開した。

＊

今朝のメニューは、北海道産ポタージュスープに茨城県産の有機
野菜

をたっぷり使ったサラダ、イギリス製のバターを塗ったフランスパ
ンに、

カスピ海のヨーグルト。夫と自分にはドリップしたコーヒーをブラ
ック

で、二人の子供には搾りたてのオレンジジュースを用意する。

ホコリひとつ落ちていないテーブルに人数分のランチョンマットを引

き、フォーク、ナイフ、スプーンを真っ直ぐに並べる。テーブルの中央

には真っ赤なバラを飾り、夫の席には新聞を用意する。BGMにクラシ

ックをかけ、これで準備万端である。

「早く起きて来なさいよ！ 冷めるじゃない！」

午前6時、ようやくダイニングへ顔を出した夫へ向って、彼女はまず

そう言った。

「こっちは朝5時から起きて準備してるのよ！？ 冷めちゃったらおい

しくなくなるじゃないの！ 子供じゃあるまいし！ どうしてあなた

いつもいつも寝坊してばかりなの！？ 少しは私の苦労も考えてよ！

私は仕事してるのよ！？ 専業主婦じゃないのよ！？ おまけに子

供だ

ってまだ小さいんだから！！ いいオトナでしょ！？ 自分で自分のこ

とくらいしてよー！」

うんざりした顔で、夫は言葉だけの謝罪を口にする。そして、自分の

席へ座るなりコーヒーに手を伸ばした。その姿を見て、彼女は再び苛立

ちが募るのを感じる。

「ちょっと！ 朝食は家族全員でって何度も言ってるじゃない！ 子供

を起こすまで待ちなさいよ！」

「……冷めたらマズイって言ったじゃないか」

「それはあなたが早く起きて来ないからでしょ！？」

捲し立てる彼女に、夫は小さく溜め息を零してコーヒーをテーブルに戻した。気まずい雰囲気にならなかったのか、彼は黙って新聞を広げる。

「ホントにもう!」

吐き捨てるように言って、彼女は廊下が続くドアのノブに手をかけた。

「サイテー!」

盛大な足音を立てて階段を登りながら、彼女は吐き捨てるように呟いた。

「もう!! いいかげんにしてほしいわ!」

夫の博文とは結婚10年目になる。今年34歳になる彼女より5歳ほど年上の彼は、同じ会社に勤める上司だ。もともと社内恋愛を嫌う風潮がある会社だったが、ヒミツの逢瀬を重ねた拳匂に見事ゴールインした。18歳で入社したばかり、初々しさと若さに溢れる22歳の夏だった。

（結婚する前は楽しかったのに……）

ウワサ好きの女たちに話が伝わらないように、車を何時間も飛ばしてデートしたり、当時はケータイが普及していなかった時代なので、

すれ違いざまにメモを交換したり、互いの家に電話をするのはもちろん、休憩時間中にこっそり会ったり、両親に結婚を反対されたり……とまるで恋愛ドラマや映画のようなシチュエーションに酔い、時に涙など流したりしながらも何とか結婚に漕ぎつけた。

（あのころに戻りたいわ……）

しかしながら、あれほど燃え上がっていた上司との禁断の愛も、いざ結婚して四六時中、一緒にいるのが当たり前になると、液体窒素でもかけられたかのように急速に冷めていった。今では、博文のどこに魅力を感じていたのかさえ分らない。

（もっといい人がいたかもしれないのに……）

最近、結婚を早まったかもしれないと思うことが多々ある。若さゆえ、とでも言うのだろうか。上司との禁じられた愛に溺れ、（本人なりに）必死で荒波を泳ぎ切り、ようやく岸に辿り着いたというのに、その先に待っていたのは、平凡な日常でしかなかった。何だか、騙されたような気分である。

「朝よ！ 起きなさい！！」

階段を上がってすぐ右手にあるドアの向こうは子供部屋だ。勢いよくドアを開いて、そう言うと、女の子らしくピンクの装飾が施されたベッドの中から長女の“姫子”がノソリと起きあがるのが見えた。

「早くしなさい、プリンセス！ ごはんが冷めるわよ！」

「まだ眠い……」

夢と現実の狭間を行き来している娘の顔を見て、彼女は自分の中で苛立ちが募るのを感じた。

「だから早く寝なさいって言ったじゃないの！ ママの言うことを聞かないで遅くまでテレビを観てるからでしょう！？ もう大きいんだから、自分で起きて来なさい！ 桜庭さん家の晴香ちゃんなんて、まだ幼稚園なのにちゃんと自分で目覚ましをかけて、お洋服も着替えて降りてくるって奥さんが自慢げに言ってたのよ！？ プリンセスはもう3年生でしょ！？ いつまでもいつまでもママに起こしてもらえないと学校に行けないなんて、恥ずかしいと思いなさい！ そんなんだ

から、一学期の保護者懇談でプリンセスちゃんは集中力がなくて担任の先生に言われるんじゃないの!？」

そこまで言っ、ようやく姫子はベッドから這い出した。緩慢とした動作でパジャマを脱ぎ、クローゼットの中にかけてある制服に袖を通し始める。もう一言、二言、お説教が必要かとも思ったが、今日は平日の朝。限られた時間をこれ以上ムダにするわけにはいかない。それに、未だに起きて来ない次女“愛美”のこともある。

「プリンセス、ビーナスを起こして来なさいよ」

「はい……」

*

ようやく家族全員がダイニングに揃った時、時計はすでに6時30分を告げていた。四人ですっかり冷めてしまった朝食を取り、姫子と愛美の髪をセットしてから、彼女は自分自身の身支度に取りかかる。パジャマを脱いで洗濯籠に入れ、色気も素気もない会社の制服に袖を通して、洗いざらしの髪にクシを通し、後ろで束ねる。化粧水と乳液

を付ければ完了だ。

化粧はしない。客商売ではないから会社側から化粧しろと言われることはないし、そんな時間はない。ついでに、あまり色気づいた様子を見せれば職場の同僚たちから男を狙っているとウワサされるのがオチだ。夫と子供を持つ身で、そんなウワサが纏わりつくのは耐えられない。それに……。

（化粧なんてしなくても、私は充分キレイだわ）

鏡に映った自分に向って微笑み、彼女は洗面所を出た。

「それじゃあ、行ってくるわね！」

ノロノロと身支度をしている夫と娘に向ってそう言って、彼女はあらかじめ玄関先に用意しておいた燃えるゴミを持って家を出る。庭に停めてある赤いコンパクトカーに乗り込み、後部座席にゴミを乗せてエンジンをかけた。

＊

「あ！ いるいる！」

家の近所にあるゴミ置き場にやって来た彼女は、フロントガラスの向こうに目的の人物を発見して無意識に目を輝かせた。ほっそりしたジーンズに、ボーダーのＴシャツ。薄手のジャケットを羽織って、燃えるゴミを出している女は、相沢美奈子。

「おはようございます」

相手も気付いたらしい。車からゴミを持って降りてきた彼女に向けて、明るい声かけられた。

「おはよう。今日は秋晴れね」

当たり障りのないことを口にすれば、美奈子にはにっこりと笑って空を見上げる。

「そうですね。でも朝と夜はすっかり寒くなってしまって」

「ホントね。まだ暖房は出すには早いしねえ、この季節はいろいろ迷うのよね」

「そうそう、迷うんですよ。子供が小さいから、部屋の温度とかすごく気を使っちゃって」

「そりゃあ気を付けないう。小さな子供はホントに、すぐ熱を出すんだから！　ウチの子も何度も熱を出したのよ」

「そうなんですか」

「ええ、そうよ！　それで慌てて病院に連れて行ったら、医者にはすごくイヤな顔されたんだから！」

「まあ、本当に？」

「そうそう！」

その時どんな態度を取られて、どれだけ傷ついたのか語ろうとしたのも束の間、美奈子はわざとらしく腕時計に視線を落とした。

「あ！　いけない！　もうこんな時間！　すみません、子供を保育園に連れていかないといけないもので」

「まあ、それはいけないわね！　じゃあ、また」

「はい、また今度」

美奈子はペコリと頭を下げて、自分の車に乗り込んで行った。彼女は指定の場所にゴミを置きながら、それとなく、遠ざかって行く軽自

動車の様子を窺う。

「もういいわね」

美奈子が運転する車が完全に視界から消えたのを確認し、彼女は相沢家のゴミ袋に手をかけた。

「ちゃんと分別してるんでしょね」

小さく呟きながら、彼女は他人が出したゴミ袋の中身を漁る。使用済みの紙おむつ、丸めたティッシュペーパー、どこかの店からの勧誘ハガキに、使い古したゴム製のサンダル、新聞紙に包まれた生ゴミ、携帯電話や公共料金の領収書などが、乱雑に詰め込まれていた。この地域で規定されている「燃えるゴミ」に違反しているものは何もない。

「ちゃんとしてるのね」

しかし、それはそれでおもしろくない。彼女は携帯電話などの領収書を手に取って中身確かめる。

「あら。旦那さんより奥さんの方が使用料金が多いわ。あの奥さん、いったい誰と話をしてるのかしら。まあ、水道代が2万円も！ いった

たい何に使えばそんなに水道代がかかるの？　ウチじゃあ考えられないわ」

続いて、彼女は乳幼児向けのオモチャの箱に目を止めた。

「まあ、こんなどこにでもある安物のオモチャを買うなんて！　子供が可哀そうだわ。ウチのプリンセスとビーナスには、3000円以下のオモチャを買ってあげたことなんてないのに」

子供には最上のものを与えるように、彼女は常日頃から心がけてきた。服も、お人形も、何もかもアメリカの一流メーカーが手がけたものばかりだ。間違っても、こんな全国チェーン店のオモチャなど買うとは思ったことはない。おかげで自分の服や化粧品が買えず、食事も質素にして、我慢に我慢を重ねてきた。

「まったく相沢さんったら、仕事してるくせに自分のことばかりで子供には何もしてあげないのね。これだから最近の母親は……。どうせ子供に離乳食を食べさせるのが面倒臭いって言って、レトルトばかり食べさせているのよ」

溜め息交じりに呟いて、彼女はゴミ袋の口を閉じる。時計の針は午前7時30分を指していた。ここから会社まで車を飛ばせば30分で着く。全体朝礼は8時から。そろそろ行かなければならない。

「私がこうやってゴミをチェックしてあげているおかげで、最近はゴミの分別が進んできたわね。市の職員に、感謝してもらいたいくらい」

とてつもなくいいことをした気分で、彼女は自分の車に乗り込んだ。

むし2

彼女が務める会社は、車のシートを作って大手自動車メーカーに納品している。俗に言うところの下請け会社だ。

「間にあつたわね」

指定の駐車場に車を停めて、工場に駆け込んだ時、毎朝の日課であるラジオ体操の音楽が鳴っていた。同じ制服を着た、さまざまな年齢の男女が、それぞれ思い思いの場所で音楽に合わせて体を動かしている。何食わぬ顔で、彼女は壁際に置いてある出勤表に名前を記入し、傍に置いてある昼食の注文用紙に希望の弁当を書き込んだ。ちなみに弁当代は給料から天引きされる。それがイヤなら自分で弁当を作ってくればいい。

「おはよう、あっちゃん」

「おはよう、静香さん」

大量のミシンが並ぶ工場内を自分の持ち場に向けて歩いてみると、聞き慣れた声がかけられた。顔を見なくても分かる。声をかけてきた

のは伊藤静香だ。年齢は彼女と同じ34歳で、小学校2年生になる女の子の母親でもある。入社した時期が同じで、同年齢の子供を持ち、同じ会社に勤める夫を持つ。価値観も同じだから、静香とはプライベートでもよく会っている。

「今日も滑り込みセーフね、あっちゃん」

「そうなのよ。子供がいるから朝の準備に手間取っちゃって」

ゴミのチェックをしていたことは敢えて言わず、とりあえず子供のことを持ち出した。理由はともあれ、子供がいることを強調しておけば、角が立たない。それに、静香とは家族ぐるみの付き合いである。彼女から静香へ、姫子の「お下がり」を回し、逆に静香の一人娘である心愛こいあから次女の愛美へ、姫子のお下がりを含

む古着を回してもらうつこともよくある。無論、無二の親友とはいえず、大事な娘に古着を着せるようなことはしない。けれどそこは「付き合い」というやつだ。

「あ、そうだ！ ちょっと、静香さん！ 聞いてよ」

「どうしたの？」

「今朝、夕飯の片づけをしてたら、キッチンにウジが出たのよ！」

「ウジ！？」

音楽に合わせて適当に体を動かしながら、彼女は今朝の出来事を逐

一、静香に語って聞かせた。

「ウジって、ハエの幼虫でしょ？　なんであつちゃんの家になんなものが出るの？　あんなに綺麗にしてるのにねえ」

静香の言葉に、内心で満足を覚えながらも、表情だけはこの上なく

顰めて見せる。

「気持ち悪いったらないんだから！　ウジとか青虫とか、ゴキブリよりキラいなよ、私！」

「分かる、分かる！　あの見た目が気持ち悪いのよねえ！」

「そうなのよ！」

ラジオ体操の音楽が終われば、全体朝礼が始められる。彼女と静香は雑談しながら、ミシンと在庫の間に作られたスペースに足向け

た。

「ええ……おはようございます。今日は不良の報告が3件ほどあります。まずは……」

マイクを手に気のない声で話し始めたのは、伊藤部長。静香の夫である。その横には役職順に、鈴木工場長、小林部長、安田部長、佐藤事務長、原口主任、森田主任、安倍主任と並ぶ。最後の安倍主任は、もちろん彼女の夫だ。ちなみに、安倍という苗字だから、彼女は静香たちから「あっちゃん」と呼ばれる。

「先日、メーカーからですね、ウチの工場で作った……」

彼女の隣で固まっているのは、上原しのぶのグループである。今年、

50歳を超えるはずなのに、上原しのぶは年甲斐もなく髪を三つ編みにして肩から垂らしている。化粧もきっちりしていて、いったい誰に“女”をアピールしているのかと聞きたくなる。周囲にいるオバサンのたちも、似たりよったりの女ばかり。ちなみにしのぶは、東北地方の出身だと聞く。そこで結婚に失敗し、子供を連れて遠く離れたこの地

に引越してきたらしい。しかしながら、上原しのぶは若い男性社員を始め、様々な年齢層にやたら人気があった。その理由は、彼女には分らない。

（あんな顔して、あの性格じゃ、再婚はムリね）

続いて目を向けたのは、今年、入社してきたばかりの18歳グループである。ほとんどの少女たちは彼女のことを「安倍先輩」「安倍さん」と呼んで慕ってくれる。それぞれ思い思いにセットした明るい色の髪型で、枯れたオジサンばかりの職場にもきちん化粧をして出勤する。彼女たちと話をしていると“流行のアイテム”情報が手に入る。

それは二人の娘たちの髪を結ってあげる時などにも非常に役立つし、可愛い装いをした女の子たちを見るのも好きだ。だから問題はないのだが……。

（小柳のヤツ、また詩織ちゃんたちのグループに混じって！ 自分の顔を見なさいよ、鏡で！ いくら詩織ちゃんたちと仲良くしたからっ

て、可愛くなんかねえんだから！)

18歳グループの中にただ一人、19歳の少女が混じって伊藤部長の話を聞いていた。小柳由香里だ。かのリーマンショックの影響で、国内の自動車会社とその下請け会社を不景気の波が襲った時、この工場にいた派遣社員もほとんど姿を消した。しかし、小柳由香里だけは残され正社員として登用されたのだ。仕事ができるわけでもなければ、

見た目が可愛いわけでもない。性格も悪い。なぜそんな小柳由香里が特別扱いされなければならないのか、彼女としては腹に据えかねる出来事だ。

(何かしたに決まってるわ。工場長に色目を使ったとか、金を渡したとか。後ろ暗いこと何もしないで、どうしてあんなヤツが正社員になれるのよ！)

ついでに小柳由香里は19歳ですでに既婚者である。夫は2歳年上で、大手銀行に務めているイケメンと聞いた。彼女が結婚したのは2歳の時。今まではこの工場内で一番早く結婚したのは自分だった。

それが一種のステータスだったのに、小柳が来てから自分は“二番”になった。

（夫が銀行員？ イケメン！？ ふざけんじゃないわよ！ なんであんなみたいな女がそんな男と結婚できるのよ！ 世の中、間違ってるわ！ 信じられない！ 私は毎朝、5時に起きて家族のために朝ごはんを用意して、掃除して、洗濯して、プリンセスとビーナスの髪をセツトして、その上で出勤してきてるっていうのに！ 家事はしない、夫に任せきり、やりたい放題のあんなヤツが……！）

ちなみに、小柳は同僚の質問に対して“家事は夫と分担でしてる”

と答えているのだが、彼女にしてみればそれは“手抜き”以外のなにものでもない。

（休日には二人でデート？ 連休には旅行？ 何よ、ブサイクのくせに！ 調子に乗って！）

これまた同僚の質問に対して小柳は“子供ができたら自分の時間が

ないと聞くので、今のうちに二人の時間を楽しみたい”と答えているのだが、彼女にしてみれば“ノロケ”にしか聞こえない。

（ブサイクのくせに……！！）

小柳のことを考えていると、苛立ちが募る。更に悪いことに、小柳と彼女は同じラインで働いている。顔を見ているだけで腹が立って仕方なかったが、夫にどれだけ訴えても小柳を違うラインに回してくれることはなかった。

「それでは、今日も一日、ケガをしないように……」

就業のチャイムが鳴った。伊藤部長はキリのいいところで話を切り上げ、固まっていた作業者たちはそれぞれのラインへ戻って行った。

「さあ、やるかー！」

仕事はいわゆる流れ作業である。最初の工程に小柳。次に彼女。最後に静香がいる。3人で共同してひとつのシートを完成させるのだ。

隣にいる小柳に向って、彼女は敢えて明るい声でそう言った。

「安倍さんって、元気ですよね」

最初の製品を手に取りながら、小柳が感心したように呟く。本日のノルマは若干、少なめ。よほどのことが無ければ、定時で終われる数字だ。

「そりゃあ、そうよ！　だって朝の5時から起きてるんだもの！」

「5時？　何してるんですか？」

「いろいろよ。仕事が終わって帰ったら、もう疲れてるでしょ？　だから、夕飯の片づけとか掃除とかは朝やることにしてるの。もう、夜はテーブルの上も何もかもメチャクチャよ！」

「へえ〜そうなんですか〜」

小柳は気のない返事をした。どうやら小柳の全神経はシートに向いているようで、彼女の話の聞くつもりはないらしい。

“ 阿倍さんって、すごいんですね ”

“ 私なんて家事ほとんどできないんですよ ”

“ 見習いたいです ”

“ 旦那さんと子供さんが羨ましい ”

目の前の仕事に集中している小柳からは、そういった答えが返って来

ない。それが、腹立たしい。

（こっちから話しかけてやってるっていうのに！）

次
内心で舌打ちしながら、彼女は渡された製品に自分の過程を施し、

の過程を待っている静香に手渡した。勤続16年のキャリアは伊達じゃ

ない。仕事はできると自負している。実際、この会社に入ってきて一年

も経っていない小柳に比べると、ひとつひとつの仕事が格段に速い。

（仕事できないくせに……）

工場には合計7つのラインがあり、それぞれ違う自動車メーカーに製

品を納入している。当然、ラインが違えば作業工程も違う。小柳がこの

ラインに入ってきて、まだ3日だ。しかしながら、彼女は自分のペース

に付いて来れない小柳が許せない。

（ハケンとは違ふのよ、ハケンとは！ 周囲が甘やかすから、いつまで

経つても仕事ができないのに、調子に乗るのよ！）

正社員と派遣社員は別モノなのだ。いつまでも派遣社員気どりで甘え

てもらってでは、周りにいる自分たちが迷惑する。

（もっと早くしなさいよ、もう！）

たどたどしい手つきでミシンを動かす小柳の手元をそれとなく睨んで

いた時、右隣にいる静香が顔を寄せてきた。

「ねえ、あっちゃん。聞いてよ」

「なに、静香さん」

最初の工程にいる小柳が遅いので、後ろの静香たちもヒマになってし

まったらしい。

「上原さんと原口主任が二人で飲んでたらしいわよ」

「うそお！？」

原口主任は46歳で、もちろん既婚者だ。専業主婦の妻との間に、
地

元の進学校に通う18歳の長男、公立の工業高校に通う16歳の次
男、

中学校1年生の長女がいる。彼自身は中越の出身だが、こちらの大
学に

進学した。そして卒業後、この会社に就職し、喫茶店で働いていた
ある

女性に一目ボレして猛アタックし、ついにその心を射止めた。式場
はホ

テルで、婚約指輪には給料2か月分のダイヤモンドを用意。長男の
妊娠

が発覚したのは結婚して半年後のこと。出産した病院は地元の赤十
字。

逆子で32時間に及ぶ難産だったが、母子ともに無事退院……とい
うこ

とまで知っている。そんな原口主任が、あの上原しのぶと二人で飲
むと

は、浮気としか考えられない。

「原口主任、何考えてるの？ あの人、奥さんも子供もいるじゃない！

何が悲しくて上原さんのよ！」

「でも、ほら、新入社員の歓迎会の時に、上原さんってば、ずいぶん原

口主任に絡んでたじゃない？」

「そう言えばそうだったわね。原口主任、奥さんにご無沙汰なのかしら」

「きつとそうね」

なるほど、と彼女は納得する。妻に相手をしてもらえないから、
鬱憤

が溜まって手近なところで発散しようとしたわけだ。それにしても、
な

ぜ上原なのか。実際に原口主任に言い寄られても困るが、上原のよ
うな

女が“女性”として見られているのに、自分はそういう扱いをされ
ない

ことが、悔しいとも思う。

「言われてみれば、最近、休憩時間になったら上原さん、一人でト

イレ

に籠もることが多くない？　今までは福山さんたちと話してたのに」

「そう言えば、そうね」

彼女の指摘に、ふいに小柳が顔を上げた。

「阿倍さん、よく見てますね」

小柳の白い顔に、何とも言えない苦笑いが刻まれている。何だか自分

が見下された気分になった。しかし、ここは表情に出すべきではない。

仮にも“主任の妻”である“正社員”の自分が、“ハケン上がりの子供”

を本気で相手にしてはならないのだ。

「まあね。でも向こうだって私たちのこと、よく見てるのよ」

「そうなんですか」

女が多い職場によくあることだが、作業員たちは常に話題を求めて他

人の行動を監視している。ちょっとした目につくことがあれば、たいて

い、その日のうちには誇張した内容が職場中に広がっている。そんな

のだ。

むし3

広い工場内に、昼休みを告げるチャイムが鳴り響く。同時に、

彼女たちは手を止めて一斉に大きく息をついた。

「さあ、お昼だわ」

「早く行きましょう、静香さん」

「ええ！」

作業の進み具合は、この時点で200個とちょっと。彼女の間感からすれば、かなりのローペースだが、この分だと何とか定時までには終われそうだ。

「静香さん、お昼は何にした？」

「私、からあげ弁当よ」

「そうなの。じゃあ、持って行くから先に座ってて」

「いいの？ いつも悪いわね」

階段を登って二階に行けば、すぐそこに食堂が見える。その一画には作業員たちが注文した弁当が積み重ねてあり、その横には無料

で飲めるお茶とタバコの自販機がある。彼女は作業員たちの間をかき分けるようにして進み、静香の弁当と自分の弁当を手取る。ついでに、片手だけで器用に紙コップにお茶を注ぐ。この場合、自分と静香の弁当は重ねて持っているわけだが、当然、下にあるのは自分の弁当だ。

「お待たせ〜！ 取って、取って〜！」

「ありがとう、あっちゃん」

静香が確保していた席に座り、彼女は弁当を広げ始める。ちなみに、なぜ率先して自分が弁当を取りに行くかというと、“静香の夫は部長”で“自分の夫は主任”だからだ。役職としては、部長の方が上である。だから当然、妻である自分たちの関係も静香の方が目上になるのだ。そういうわけで、静香は自分のことを“あっちゃん”と呼び、自分は静香のことを“静香さん”と呼ぶ。

「なんだか、同じ味ばかり食べてる気がするわね。新作が出ても、ここの弁当って、中に入ってるモノほとんど同じでしょ？ 組み合

わせが違っただけで」

「ホントねえ。でも自分でお弁当の用意するのは大変だし」

「あっちゃんならできるんじゃないの？」

「ムリ、ムリ！ 入社した時からずっと、お昼はお弁当を注文するものだって感じだったから。あ、静香さん、お茶のおかわり取って来ようか？」

「いいの？ じゃあお願い」

通常業務での、こういった気配りはもちろんだが、プライベートで遊ぶ時も同じだ。二人でどこかに買い物に出かける場合、優先するのは静香の意見だし、車を出すのも当然、彼女だ。家族ぐるみでバーベキューなどする時は、食材の調達から場所の確保、肉を焼くことまですべて安倍家が担当する。

また、会社の飲み会がある時などは、安倍家の車で伊藤部長と静香を送り迎える。ついでに、そういった飲みの席では、目下の者は目上の者より派手な服を着ない、というのも常識である。しかし、

だからと言って静香に向かって直接、着ていく服の色を聞くのもルール違反だ。あらかじめ静香と一緒に買い物に出かけ、彼女が飲み会に着ていく服を買うところに一緒にいて、それとなくチェックするのが正しい方法なのである。

夫たちはどう思っているのか知らないが、こういった妻の絶え間ない努力が、夫の出世に繋がっていく……と、彼女は本気で信じている。

「あら？」

静香のためにお茶を用意し、席に戻ってきた時だった。何の変哲もない長テーブルの上を這う、ふたつの白い物体がある。

「ちょっと、やだ！」

「どうしたの？」

緊迫した彼女の声に、静香が顔色を変えて立ち上がった。

「ウジ！ ウジがいる！」

長テーブルを指しながら答えた時、静香が慌てたようにそこを飛

びのいた。周囲で弁当を食べていた者たちも、ただならぬ二人の様子に何事かと注意を向け始める。

「どこ、どこ？」

静香も典型的な虫嫌いだ。彼女の腕にしがみつキながら、静香はウジの位置を確認しようと視線を彷徨わせる。

「そこよ、そこ！　そこに2匹もいるじゃない！」

「え？　どこ？」

「だから、ここだってば……！　あら？」

静香の方に視線を向けてから改めてウジがいた場所を見ると、そ

こには、ついさっきまでいたはずのウジが消えていた。

「え？　だって、ついさっきまでここにいたのに」

「いないわよ。見間違いでしょ？」

「そんなはずないってば。ちゃんと見たんだから」

念のために弁当の裏側や、小さなカバンの中、床の上なども調べてみるが、ウジ虫らしきものは見当たらない。

「ご飯粒をウジと間違えたんじゃないの？」

静香がそう言った時、二人の様子に注目していた作業員たちから何とも言えない笑いが漏れた。その中には、当然のことながら小柳と18歳グループの顔も混じっている。

“大嫌いな小柳の前で”

“自分に憧れている後輩たちの前で”

“バカにされた”

“恥をかかされた”

彼女は一気に血圧が上昇するのを感じる。

（静香さん……分かってて言ったんだわ。何よ！ あんなにいつもいつも気を使ってあげてるっていうのに！）

毎日の苦勞の報酬が、こんな扱いなんて吐き気がする。

（許せない！ だいたい、こんなことになったのは博文が未だに主任から出世しないからよ！ あの人が伊藤部長よりも上だったら、私がこんな思いしなくて済むのに！）

彼女は、煮え切りかえるハラワタを何とか宥めながら元通り席について食事を再開する。天ぷらを咀嚼しても、魚を突ついても、何の味もしなかった。

（早く博文に出世してもらわなくちゃ！　いつまでもこんな扱いを受けるなんて耐えられない！）

＊

昼休みを何とも言えない悶々とした気分で終えてラインに戻れば、そこにはすでに小柳の姿があった。真剣な表情でマニュアルを読んでいる姿は、彼女にしてみれば役職位にある男たちへのアピールにしか思えない。小柳は静香と自分の存在に気付いて視線を上げた。につこりと笑顔で会釈してくる様子が、何だか先ほどの事件を嘲笑っているようで、気分が悪い。

「勉強熱心ねえ」

彼女の代わりに声をかけたのは静香だった。

「そういうワケじゃ……ミシンの糸がよく絡まるんですよ」

（なに静香さんにコビ売ってんのよ、小柳のくせに！ あんたみた
いな女がいくら努力したって、主任どころか班長と結婚することさ
えムリよ！）

すでに既婚者である小柳に向って、内心でそんな嫌味を呟く。て
つきりそこで話を終えるだろうと思ったのだが、意外にも静香は小
柳に向って笑顔で言葉を続けた。

「ああ、糸ねえ。ミシンが古いからよく絡まるし故障するのよねえ」
「そうなんですよ」

「裏ワザがあってね、本格的に絡まったら保全チーム（修理班）を
呼ばないといけないけど、ちょっと絡まっただけだったらこうして
ね……」

静香は小柳の前で実演を始める。

「こうやって……」

「ここをこうして、こうすればいいのよ！」

静香の言葉を遮り、彼女は勢い込んでそう説明した。たとえ相手

が小柳でも、未熟な人間に何かを教えることは得意だし、好きだ。

静香よりも自分の方がうまく相手に説明できるし、何より後輩に仕事を教えている姿を曝すことは、自分だけでなく夫の博文の出世にも繋がる。

「そうそう、そうなのよ」

「へえ」

彼女が割り込んで説明したことに、静香は特に気にした様子を見せなかったが、小柳は曖昧な笑みを浮かべた。

「ありがとうございます。参考になりました」

それでも、小柳は軽く頭を下げてみせる。しかし。

“ 阿倍さんって、何でも知ってるんですね ”

“ さすが勤続16年ってカンジします ”

“ 安倍さんと同じラインで頼もしいですよ ”

そういった言葉は、返ってこなかった。

（せっかく教えてあげたのに！）

彼女は再び、内心に苛立ちを感じた。

むし4

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響く。同時に、作業者たちは一斉に仕事に取り掛かり始めた。

「ねえ、あっちゃん。話は変わるんだけどさ、聞いてくれる？ ウチの近所のアパートにね、最近になって若い夫婦が引っ越してきたんだけどさあ」

静香が話しかけてきたので、彼女は作業する手を止めて静香と向きあふ。話をする時の常識は相手の顔を見ること。これは常識である。ましてや、会話しているのが部長の妻である静香であればなおさらだ。

「世間知らずっていうか、なんてゆーか、ゴミの分別とかいまいち分かってないみたいなのよ。ビールの空き缶とかが燃えるゴミの袋に入って出してあったりして。ほら、燃えるゴミの袋って半透明だから中身が見えるじゃない？ 見るつもりはないんだけど、つい見えちゃって」

「まあ、本当に？ 誰かが教えてあげた方がいいんじゃない？ いつまでもそんなんじゃないや周りが迷惑するわよ」

静香が目で合図をしたので会話を続けながら振り向けば、製品に自分の工程を施した小柳が何とも言えない顔で彼女を見つめていた。声には出していなかったが、その目が彼女を責めているようで、内心に不快な感情を覚える。けれど、彼女も敢えて何も言わずに製品を受け取った。

「だいたい最近の若い子って、常識がない子が多いのよ。まだ自分が子供なのに早くから子供を産んだ挙げ句、寝返りもできない子供を殴って殺すんでしょ？」

「それ、ニュースで見たわ」

これから自分が話そうとしていた内容を、相手がすでに知っていると分かり、彼女は多少、出鼻をくじかれた気分になる。しかし、気にせずに話を続けた。

「可愛そうったらないわよね、ホント！ 大人の真似して子供を作

る前に、もつと自分が大人になれって言いたいわ！　結婚だの出産だの、そんなのは大人の仕事なんだから！」

何気なく左隣にいる小柳に向けて言っただつたが、どうやら自分の仕事に集中しているようで、彼女の嫌味には特に反応がなかった。

（可愛げがないんだから、ホント！　もうちょっと傷ついた顔くらいしなさいよ！）

自分のことを言われているのだ分かって多少なりとも顔色を変えらるならば、彼女としても態度を改めてやらなくてもない。しかしながら、こうまで「聞こえていないフリ」をされるとこちらの苛立ちが募るばかりで、ひたすらおもしろくない。

「そう言えば、ウチの近所にもいるのよ。新しく越してきた若い夫婦が」

「へえ、どんな子？」

気を取り直して、彼女は今朝ゴミ捨て場で出会った顔を思い出す。

せっかく仕入れた情報を、まだ公開していないことによつやく思い至つたのだ。

「相沢さんつていうんだけどね、旦那さんと奥さんは27歳で、今年の3月に息子さんが生まれたみたいなのよ。もともと奥さんは四国の出身で、大学時代から付き合いはあつたみたいなんだけどね、なかなか結婚まで辿り着かなかつたみたいなのよ。それが、結婚するより先に子供ができちゃつて！おろすよりは結婚しようつてこゝとで結婚したらしいわよ」

「今、流行りの“できちゃった婚”つてヤツ？」

静香の顔を見ながら話を続けていると、後ろから小柳に小さな声で名前を呼ばれた。振り向けば、やはりそこか責めるような目つきをした小柳が自分に向つて製品を差し出している。気にせず、彼女は静香の方を見ながらシートを受け取つて話を続けた。

「そうそう！ そうなのよ！ 順番が逆よ、ホント！ でもあの奥さん、子供が生まれてからしばらくは実家に帰つてたしねえ、こつ

ちに戻って来たと思っ たら子供を預けてコンビニでバイトよ！ 正社員でもあるまいし、どうしてそんなムリしてまで働かないといけないのって思うでしょ？」

「まあねえ。ローンとかあるんじゃないの？」

「あるとしたら車かしらね。あそこの家、奥さんも旦那さんも随分、大きな車に乗ってたもの。子供が生まれる3か月前に車は2台とも手放して、軽自動車を買ったようだけど。でも、あの軽自動車、中古よ？ そんなにお金がかかるとは思えないわ。新しい型でもないし。そう言えば旦那さん、パチンコ屋に出入りしているみたいだから、もしかしたら消費者金融から借金でもしてるのかも」

「最近の消費者金融って誰でも借りれるんでしょ？ それ、ありえるわよ！」

静香から同意の言葉をもらい、彼女は自分が立てた仮説が妙に真実味を帯び始めた気がした。何だか探偵にでもなったようで気分がいい。

「でも、それだけじゃないのよね。あの奥さん、やたらケータイの通話料金が高いのよ。もしかしたら男でもいるんじゃないかしら。

チャラチャラした人だし」

「ホントに!？」

「ありえない話じゃないわよ。それに、子供。ホントに旦那さんの子供なのかしら。あの二人が付き合ってることは知ってたけど、子供ができてから結婚までが急展開すぎる気がするのよね。別の男の子供を育ててるんじゃないかしら。正社員でもないのに働くなんてそれしか考えられないわ」

「うわ」

静香が溜め息交じりに呟いた時のことだった。ふと視線を上げた先に、白く蠢くウジ虫の姿が目に入った。

「ちょっと、やだ!!」

彼女は作業途中の製品を放り投げ、思わず後ずさりしていた。ウジ虫は作業台のアルミ製の棚に、3匹いる。それぞれ身を寄せ合う

ように、小さな体を必死に曲げ伸ばししながら上へ上へと登っていた。

「どうしたのよ、あっちゃん！」

「ウジ！ またウジがいるわー！」

「ええ？」

ラインが止まる。隣の静香と小柳がウジ虫という言葉に、嫌悪感が滲む表情で彼女の視線を追いかけた。

「ウジなんていないわよ」

「ウソ！ いるじゃない！」

「いませんよ。どこにも」

二人の視線はひたすら作業台と彼女を行き来している。しかし、一向にウジ虫を見つけられた様子はない。静香と小柳が、次第にいぶかしげな顔になっていく。

「ちょっと。どうしたのよ、あっちゃん。ウジなんてどこにもいないじゃない」

「そんなことないわ！　そこにいるんだから！！」

「どこですか？」

彼女は思わず二人の顔を交互に見た。そして再びウジ虫がいた場所に視線を向ける。すると、白い幼虫は影も形もなくなっていた。

「……いない」

啞然とした顔で、彼女は先ほどまでウジ虫が這っていた場所を凝視してしまう。

「そんなはず、ないわ……」

絶対に見間違えなどではない。食堂の件があったので、今度はきつちり、その姿を確認したのだ。

「見間違いですよ、安倍さん。きっとグリース（潤滑剤）が何かです。しっかりしてくださいよ」

小柳が呆れたような口調で言うてくる。その瞬間、彼女は目の前が赤くなるほどの怒りを覚えた。

（こんなヤツに……！）

弱みを握られた。嫌いな人間に弱みを握られることほど腹立たしいことはない。最早、ウジ虫が「消えた」ことなど、どうでもいい。問題はこの小娘だ。

（ただの社員のくせに！ 私は主任の妻なのよ！？ 今に見てなさい！ 博文が工場長に出世したら、あんたみたいなバカは即効でクビにしてもらうんだから！）

憤りを感じながらも作業に戻ろうとした時、今度は作業途中の製品の上にウジ虫を見つけた。

「きゃあああああ！！」

「あっちゃん？」

まただ。またウジ虫がいる。

「誰よ、こんなイタズラしたのは！」

「何よ。今度はどうしたの！？」

同じだった。静香たちには見えていないらしい。傍にいる二人にはいぶかしげな表情しか浮かんでいない。

「ウジがいる！ ウジがいるのよ！ 見間違いじゃないわ！」

「どこにもいないじゃない！」

「いるわよ、ここに！！ どうして分からないの！？」

そう言って再び視線を向けた時には、確かにいたはずのウジ虫はどこにもいなかった。

「阿倍さん、どうしちゃったんですか？ 大丈夫ですか？」

小柳が心配そうに覗き込んで来る。

「大丈夫じゃないわ！ どうしていないの！？ 確かについさっきまでいたのよ！ ウソじゃないんだから！」

小柳への怒りが薄れ、彼女の頭の中はウジ虫に占領された。あまりの出来事に我を忘れて叫んでしまったので、思いのほか、その声は工場内に反響する。他のラインで働いていた作業者たちも、何事かと注目し始めていた。

「どうしたんだ？」

騒ぎを聞きつけてやってきたのは、森田主任だった。

「何かあったのか？」

彼は尋常でない様子の彼女と、状況が全く理解できないという顔をしている静香と小柳を交互に見比べる。

「あっちゃんが……」

静香が珍しく言葉に詰まった様子で彼女の顔を見る。彼女の顔は、蒼白になっていた。

「具合でも悪いのか？」

森田主任は、心配そうな顔で彼女の傍へ歩み寄って来る。そんな主任の顔を、彼女は勢いよく見上げた。いつもの、見慣れた森田主任の顔が、そこにある。どこで焼いてくるのか知らないが、やたら日焼けした肌に、日本人離れした高い鼻、大きな目。どこからどう見ても“イケメン”ではないが、彼は入社したばかりの若い女の子たちから、定年間際の男性まで、幅広く人気がある人物だ。

「阿倍、どうしたんだ」

もともとこの工場では、主任クラスと言えば、事務所で“書類整

理という名の給料ドロボー”が定番だったのだが、森田主任は残業も厭わないし、面倒な作業でも率先して行っ。仕事も丁寧だし、教え方も実に分かりやすい。おまけに自分の役職を鼻にかけるところがないうえ、やたら話しやすい。ついでに、いろいろと融通が利く役職でもある。

「ウジ！ ウジがいたんですよ！ ここに！」

彼女は叫ぶように訴えた。しかし、彼は軽く片眉を上げただけで、彼女が求める反応はしてくれない。

「ウジ？ 別にいいじゃないか、ウジくらい。不景気で仕事がないからウチの工場に見学に来たんだろ？ 好きなだけ見せてやれよ。人件費がかかるわけじゃあるまいし」

森田主任にしてみれば、たかがウジ虫ごときで騒ぎ立てたのがバカバカしいのだろう。大きなトラブルでないと分かってほっとしているのが、手に取るように分かる。しかし、彼女にしてみればそれどころではなかった。

「そういう問題じゃないんです！ 私が見た時には確かにいたんです！ でも静香さんと小柳さんには見えなくて！ もう一回、見た時にはもういなくなつてて！」

「ふ〜ん。そりゃあ新種だな。もしかしたら擬態能力を身に付けたのかもしれん。捕獲してマスコミに発表してみたらいい。きつと世界中からメディアが集まるぞ」

森田主任はこれ以上ないほどマジメな顔でそう言った。途端に、堪え切れなかったらしく静香と小柳が笑い崩れる。

「メディアが集まったらウチの工場、儲かりますよね？ その時にはお給料のアップをよろしくお願いします“しにん”！」

「誰が死人かー！！！」

さつそく森田主任のジョークに便乗する小柳。更にそれに乗つたのは静香だった。

「メディアが取材に来るならちゃんとメイクしとかないと！ 明日からちゃんとしようー！」

「ああ、そうしろ、そうしろ。旦那が喜ぶぞ」

「“しにん”の家の奥さんはちゃんと化粧してるの？」

「死人、じゃない。主任だ、主任！」

「はいはい。しにんね、しにん！」

「わしゃあ、まだ死んどらんわ！」

渦中の彼女を無視して、森田主任と静香、そして小柳が楽しそうに冗談を交わしていた。

（なによ……！ 他人事だと思って……！）

彼女は無意識に、握りしめた拳に力を込める。

むし5

午後5時。終業のチャイムが鳴る。彼女のラインは、あれからミンのトラブルがあったり、再びウジ虫が現れて彼女が騒いだりしたために、定時までにノルマを達成することができなかった。

「残業か〜」

天井を見上げて、小柳が疲れたように呟くのが聞こえる。

（寝ぼけたこと言ってんじゃないわよ！ 正社員でしょ？ 自分のノ

ルマが達成できなかったら残業になるのは当たり前じゃない！ ハケ

ンとは違うのよ、ハケンとは！）

首を回したり、腕を揉んだりしている小柳を見ながら、彼女は内心で激しく毒づいた。

「今日こそは定時で帰れると思ってたのになあ……」

その言葉が、更に怒りをかきたてる。

（だいたい、定時で終わらなかったのは、あんたが遅いせいじゃない！）

自分のせいで遅れたのに、どうしてそんなにヤル気がないのよ！)

小柳は、正社員としての自覚が足りない。社会人としての常識も欠けている。そもそもこう言う場合、自分のせいで遅れて残業になってしまったことを同じラインにいる彼女と静香にきちんと謝罪すべきなのだ。それに……。

(会社だって残業代なるべく出したくないのよ！)

不景気の波は、この下請け会社にも押し寄せている。たくさんいた派遣社員たちが小柳を残して姿を消したのがその証拠だ。それに、会社の経費を圧迫している最大の支出は、残業代を含む人件費である。

それは一度でも研修を受けた人間ならば誰でも知っている。正社員として会社のことを思うなら、定時まできちんと仕事をこなし、なるべく残業代を貰わないのが正しい考え方だ。だから……。

「じゃあ、私は帰るわね」

当たり前のことを言っただつたのだが、小柳は呆気にとられた顔をした。

「え？」

「私は会社のためを思って残業しないのよ」

「はあ……」

納得していないらしい。もう一度、会社の研修を受けて来い、と彼女の本気で思った。

「小柳さんも長く務めてたら分かるわよ」

「はあ……」

小柳は、何とも言えない顔をしている。苦笑いというのか、呆れたような顔というのか。しかしながら彼女にしてみれば、おかしいことを言っただけではない。むしろ、正社員として正しい選択をしているだけの話だ。ものの道理が分かっていない19歳の子供を相手にするのともうかと思っただけ、それ以上は何も言わなかった。

「じゃあね、静香さん！ 悪いけど後はよろしく！」

「分かったわ。気を付けてね。今日は早く寝なさいよ」

「分かってます」

振り返ってみれば、さんざんな一日だったと思う。彼女は出口に向って工場内を横切りながら、思いきり溜め息を落とした。

（静香さんの言うとおり、今日は早く寝よう。きつと疲れているんだわ。ウジを何度も見るなんて。夕飯も簡単に済ませよう。冷蔵庫の中に何があったかしら）

今は遠い場所にある冷蔵庫に思いを馳せながら、工場を出て右手にある駐車場に辿り着く。舗装されていない、石が剥き出しの歩きにくい地面を進み、自分の赤いコンパクトカーに近づいて行くとポケットに入れたキーに反応して勝手にロックが解除される。運転席のドアを開け、シートに座ろうとして、彼女は絶叫した。

「なんで！？ ちょっと！ いやあああ！！」

ハンドルに、虫がたかっている。

「どうして！？ なんでこんなにいるの！？」

ハンドルに群がっていたのは、今日一日さんざんな思いをさせられたウジ虫だけではない。太った男の指ほどもある大きなイモ虫に、ア

ゲハ蝶の幼虫らしき黒い虫。数えきれない青虫、そして毛虫……。それぞれが肥え太った体をくねらせながら、狭いハンドルの上を埋め尽くすように蠢いていた。

「やだ！ いやああああ！ 誰かああああ！！」

声の限りに叫ぶ。おぞましさに肌が粟立った。つい視線を向ければ、

アゲハ蝶の幼虫に独特の模様までしっかりと見てとれる。黒い体表に、

赤い斑点。子供のころ、理科の図鑑で見かけて以来ずっと嫌いだったアゲハ蝶の幼虫が、そのままの姿でそこにいる。

「いや！ いやああああ！！」

大きな毛虫は、動く度に体中を覆い尽くした毛が光を受けて波打つ様子まではつきりと分かる。青虫、イモ虫は、ブニブニした肉感的な体の感触がはつきりと分かる。気持ちが悪かった。吐き気がしそうだ。

こういった生き物は、見ているだけで嫌悪感を呼び起こす。ましてや、

ハンドルを埋め尽くす数ともなればなおさらだ。

「どうかしたの？」

声をかけてきたのは、桑田という年配の作業者だった。どうにも見た目が好きになれないことと、彼にまとわりつく“変態”的な雰囲気
に嫌悪感を感じるせいで毛嫌いしていた男だが、今はそんなことは言
っていらなかった。

「虫……虫が……！」

「虫？」

虫、という言葉をと何か口にすると、あからさまに桑田が呆れた顔
になった。男はみんなこうだ。彼女のように、虫を見て悲鳴を上げる
女を見て、すぐに軽蔑する。

「悲鳴が聞こえたから何事かと思ったら……」

「すごい数なのよ！ どうにかしてよ……！」

桑田の声にはあからさまな侮蔑が含まれていた。大量の虫を見て動
転している彼女の耳に、その声は果てしなく腹立たしいものに聞こえ

た。

「どこにいるんだ？ どこにもいないよ」

「ハンドルよ！ ハンドルにたかっているの！ 見えるでしょ！？」

「ハンドル？」

桑田は彼女の車を覗き込む。そして何とも言えない表情を浮かべた。

「ハンドルに虫なんて一匹もいないよ」

「そんなバカな！」

「確かめてみたらいいよ。本当にいないから」

桑田に励まされるようにして、彼女は自分の車に歩み寄る。恐る恐る中を覗き、そこに見慣れたいつものハンドルを見つけた。あれほど

たくさんいた虫は、1匹もない。

「ほら、いないだろ？」

いない。食堂と工場内でウジ虫を見かけた時と、まったく同じだ。自分にだけは見えているのに、他人には見えていなかった。そして、視線を逸らしてもう一度、見ると跡形もなくなくなっている。

「あんだ、昼間にウジがどうとか騒いでたよな。アレと同じで見間違
いじゃないのかい？」

「……！」

桑田にも見られていたのだ、と知って彼女は血が沸騰するような激
しい憤怒が体中を駆け抜けていくのを感じた。自分が恥をかいた瞬間
を、こんな男にまで見られていたらしい。こんな、出世できず定年ま
で作業員で終えるような、家に帰っても酒を飲んで寝るしか能がない
ような、こんな男に……。

「見間違いないわ！ 確かに虫がたくさんいたんだから！」

「だって、どこにもいないじゃないか」

「私が見た時にはいたのよ！」

「だから、どこに？」

「ハンドルだってば！」

ヒステリックに叫ぶ彼女を見て、桑田は大きな溜め息を零す。それ
が、彼女の感情を逆撫でした。しかし、そんな彼女の心境には気づか

ず、桑田は言葉を続けた。

「あんたのダンナ、安倍主任だよな？ 同じ職場なんだから、迎えに来てもらって一緒に帰ったら？ あんた、なんか危ないよ」

言われなくてもそうするつもりだった。けれど、桑田のような男に
敢えて言われると、屈辱が増す。

「それじゃ、お先に」

桑田は背を丸め、自分の車に向って歩いていった。ほどなくして聞
こえてくるエンジン音。待つほどもなく、彼が運転するボロボロの軽
自動車が、駐車場を出ていった。

「博文……」

虫を見た恐怖と、桑田にバカにされた屈辱に涙が浮かぶ。こんなと
ころで泣くわけにもいかず、彼女は軽く鼻をすすって携帯電話を取り
出した。

*

「だから、本当にいたのよ！ ハンドルのところにイモ虫とか青虫と

か！ 食堂の時だって！ 仕事の時だってそうなの！ でも静香さんたちには見えてなくて！ 次に見た時にはもういなかったの！」

「ふうん」

結局、彼女が尋常でない様子で事情を訴えだせいで、博文は残業を放り出して帰宅の途についてくれた。しかしながら勢い込んで今日の出来事を話す彼女とは対照的に、博文は始終あいまいな返事をしてばかりだ。

「絶対おかしいと思わない！？ どうして私だけに見えるの？ そんなことあるはずないじゃない！ どう考えてもおかしいわよ！！」

帰宅ラッシュで渋滞中の国道は、それそのものが苛立ちを募らせるに充分な要素を含んでいるのだが、それに加えて博文の反応がこんな感じだと血圧は上昇の一途を辿り、下降する目途が一向にたたない。「それに静香さん！ あんなに私たちに世話になってるっていうのに、

みんなの前でバカにしたのよ！ 信じられる！？ おかげで私はいい

笑い物よ！」

思い出したらより一層、血が沸き立った。彼女は目を剥いて前方を走っている話題の軽自動車をにらみつける。後部に飾られたぬいぐるみを見て、ドライバーは若い女だと断定した。

（トトロト走ってんじゃないわよ！　どうせ若葉マークが外れたばかりの子供が運転してるんでしょ！？　化粧ばかり練習してないで、人並みに車の運転できるようになりなさいよ！　まったく、どうして教習所はこんなヘタクソに免許を取らせるのかしら！）

渋滞中にスピードが出せないのは当たり前だということは、知識では知っている。しかし、感情が理解を拒絶する。

「仕事中だつてそうだったわ！　私には見えて他の人たちには見えなかったの！　これ、どう思う！？　おまけに森田主任からネタにされちゃうし！　下着集めが趣味の桑田みたいな“ヘンタイ”からもバカにされたのよ！　どうして私がそんな扱いされなきゃならないの！　？」

私は主任の妻よ！？　ただの正社員じゃないのよ！　あなた、自分が

バカにされてるんだってこと、少しは自覚しなさいよ！ そんなんだから、いつまでたっても部長に出世できないんじゃない！」

「……関係ないだろ？」

ひどく押し殺した声で、博文はそう言った。

「関係ないはずじゃない！ 私がバカにされるってことは、あなたが役職としてナメられてるってことなのよ！ 今は不景気だし、いつまでもそんなだと、いつヒラの作業員に戻されるか分かったもんじゃないわ！ もうちょっと自覚してよ！ ちゃんと仕事して！」

「……だったら虫くらいで呼び出すなよ」

至極もつともな意見であるが、もとより彼女は自分の意見に反対する人間が許せないタイプだ。聞く耳など、最初から持ち合わせていない。

「それとこれとは話が別でしょ！？ 私、もう二度とあの車に乗らない！ 想像してみなさいよ！ ハンドルが見えないくらいいたくさん虫がいたんだから！ 気持ち悪いったらないわ！」

「見間違いだろ？」

「違うって何回、言ったら分かるのよ！」

ハンドルを握る博文が、大きく溜め息をついた。赤信号に引つ掛かり、車は停まる。自宅まで、もう少しだ。ふと、彼女の脳裏に浮かんだことがある。

“私、呪われてるんじゃないかしら……？”

可能性はいくらでもある。彼女と同じ工場で働く女たちは、誰も彼もが平気で他人を呪うような人間ばかりだ。今朝から続くおかしな出来事が誰かの呪いだとしても、何の不思議もない。

「……森田主任から話は聞いたよ。仕事中にウジが出たとか言っ
て、何度もラインを止めたんだってな」

真剣に自分に呪いをかけた相手を思い描いていた時、博文から軽蔑の混じった眼差しが向けられた。その言葉に、彼女は憤慨する。

「仕方ないじゃない！ ウジが製品の上に乗ってるのに作業ができる

はずないでしょ！？　だいたい今日、残業になったのは小柳さんが遅いせいよ！　あの子がいつまでたっても仕事を覚ええないから！　だから残業になったんじゃない！」

「小柳さんは仕事ができる子だよ。遅刻、早退、欠勤もない。飲みこみも早いし、素直でいい子だ。仕事に対して熱心だし、ひとつの作業ができるようになるペースも他の新入社員より確実に早い」

信じられなかった。夫が小柳を庇っている。その事実には、彼女は目がくらむような嫉妬を覚えた。

「何よそれ！　じゃあ私のせいだって言うの！？　私のせいで残業になったってあなたは言いたいのか！？」

「違うのか？」

「違うに決まってるじゃない！　私は正社員で、16年もこの会社に務めてるのよ！」

博之が何か言いかけたが、それを遮って彼女は溜めこんでいた（つもり）文句を洪水のように吐きだす。

「だいたい、なんで小柳さんを見て仕事ができるって思うのよ！ あの子のこと知らないの！？ 自分が遅いせいで残業になって静香さんと私に迷惑をかけるっていうのに、すみませんでしたの一言もないのよ！？ 不景気で会社もお金がないんだから、なるべく残業せずに定時までには仕事を終わらせるのが正社員の役目でしょ！？ だいたい、旦那と二人で悠々自適の生活してる、ふざけた主婦と、子供がいる私を同じにしないでほしいのよ！ だいたい、あの子は家事だってしないし、遊んでばかりだし、19歳かそこで結婚してるのよ！ まともな子じゃないのは目に見えてるでしょ！？ それに結婚してるっていうのに、髪を染めたり、派手な化粧したり！ ピアスを付けたり、指輪をはめたり！ 私だってお洒落がしたいわ！ でも結婚してるし、

子供もいるから我慢してるんじゃない！ なのに、どうして小柳さんが仕事ができるって思うのよ！ 普通は結婚したら、家族のことを思って自分のことは我慢するのが当たり前でしょう！？ この前の飲み

会の時の服装だって見たでしょうが！　とても結婚している女のする格好じゃなかったわ！　職場の若い男に色目を使っただけで！　仕事なんてちつとも覚ええない！　それでどうしてあの子がそういう評価になるのよー！」

「……仕事には関係ない。客観的な事実で評価してるんだ。このままいけば来年あたり、班長になるかもな」

私道に入った車が、蛇行した道を進んで行く。ひどい車酔いに似た眩暈を感じた。

「ウソ、でしょ？」

「本当だ。今年いっぱい徳本さんが定年だろ？　代わりになる人材を誰にしようかと話していた時、小柳さんが適任じゃないかということと話がまとまっているんだ。大沼さんという意見もあったが、大沼さんが抜ければ別のラインが動かなくなるし。今のところ小柳さん以外に候補はいない」

見慣れた我が家が見えた。築10年の、まだまだ新しいピンク色の

外装が、夕陽に照らされている。丁寧に整えられた庭に、コスモスの咲く花壇、塵ひとつ落ちていない玄関。いつも通りの家なのに、どこか違って見える。

「そういうわけだから、伊藤部長の奥さんと喋ってばかりいないで、お前も、もうちょっとマジメに仕事してくれ」

コンクリートで舗装された駐車場に車をバックで止め、博文はエンジン

ンを切った。

「ひどい……」

彼女を残して車から降りていく夫の背を見送り、彼女は消え入るよう

な声で呟く。

「こんなのって、ないわ……！」

堪えていた涙が、落ちた。

（あんなに一生懸命、働いてきたのに！ プリンセスとビーナスを妊娠

してる時だって、ギリギリまでラインに立ってあげたのに！ 産後

休暇

もそこそこに仕事に復帰してあげたのに！ 毎朝5時に起きて家事をし

てるのに！ プリンセスとビーナスの髪だつてきちんとセットして
恥ず

かしくないように学校に送り出しているのに！ お洒落したくても
我慢

して仕事と家庭を優先させてきたのに！ なのに……！

なぜ小柳のような女が優遇されるのか、どんなに考えても理由が
分か

らない。辛かった。今までの自分の苦勞と努力と我慢を、すべて否
定さ

れたような気分になった。

（私、不幸だわ……）

きつと世界中のどこを探しても自分より不幸な人間はいない。そ
う思

うと無償に泣けてきた。

（幸せに、なりたい……）

彼女は、自分よりも幸福な人間を許せない。同時に、自分が誰よりも

不幸でなければならない。そういう人間だ。

むし6

しばらく車の中で泣くと、多少なりとも気分が落ち着いた。泣き腫らした顔で、彼女は車を降りる。そして憂鬱な気分で玄関の戸を開き、そのままキッチンへ向かった。

（こんな気分の時にも家事をしないといけないなんて……）

ダイニング・テーブルの上には朝食の皿がそのまま残されている。これからそれを片づけ、新たに夕飯の支度をしなければならないのだと思うと、より一層、気分が沈んだ。

（どうして私だけ……）

朝の5時に起きて夕飯の片づけをし、朝食を作り、子供と夫を送り出し、自分まで仕事に行かなければならない。仕事が終わって帰って来ても、ゆっくり息をつく間もなく夕飯の支度をし、洗濯をして、風呂を掃除する。

（他の人たちは人生を楽しんでいるっていうのに……）

自分だけが不幸な扱いを受けている。そんな気がしてならなかつ

た。彼女は夫と子供のために家庭の犠牲となり、会社たちのために社会の犠牲となっている。

（私の人生、このまま終わるのかしら）

何ひとつ楽しいことがないままで、何ひとつ幸せを感じることがないままで、ただ年老いて墓に葬られるのかと思うと無性に泣けてきた。

（私は、被害者だわ！）

そう思いながらも、ダメな主婦のレッテルを貼られることがイヤでテーブルの上の食器をシンクに下げ、洗い始める。家事を始めると、リビングから流れてくるテレビの音が無性に気になって仕方ない。

（ホントに、もう！ テレビばかり見てないで、少しは手伝いなさいよ！）

真剣な顔でアニメを見ている姫子と愛美にチラリと視線を向け、彼女はそう思った。しかしながら、娘たちが実際に手伝うと言い出

してもらっても実は困る。

（ダメだわ！ 家事は母親の仕事なんだもの！ ウチのママは家のことを何にもしない、なんて友達に言いふらされたら、近所のいい笑い物だわ！）

子供は正直だ。思ったことは、そのまま親に報告する。姫子と愛美の友達が家に帰って自分の親にそう言えば、翌日、“安倍さんの奥さんは”とウワサされることが目に見えている。結婚して12年。彼女はずっと自分が“完璧”な妻であり、“完璧”な母親であり続けたと自負している。人は他人の「負」の部分には敏感に反応するものだ。10年以上かかって築き上げてきた近所でも評判の“完璧”な女というイメージを、崩すわけにはいかない。

（ああ、もう何もしたくない……）

ようやく皿を洗い終え、彼女は重い足取りで冷蔵庫へ向かった。

（とりあえずゴハンを炊かないと……）

安倍家では、春の終わりから秋の始まりにかけて、米はミネラル

ウォーターのペットボトルに入れ、冷蔵庫の野菜室で保管するのが定例である。これは夏に米を常温で保管していると虫がつくからだ。ウジ虫に似た、5ミリにも満たない小さなコメ虫が水の中から大量に浮き上がった時の恐怖は未だに忘れられない。以来、彼女はずっと気温が上がってからこの方法で米を保存することになっていた。

（おかずは何にしよう。簡単なモノで済ませたいけど、それじゃあ主任の妻として見栄えがしないし……）

そんなことを思いながら、彼女はペットボトルのフタに手をかける。それを回そうとして、彼女は米粒が不自然に動いていることに気付いた。

「ちよつと……！ いやあああ……！」

見れば、ペットボトルの中には、ウジ虫に似た小さな白い虫がいる。見覚えがあった。これは米につく虫だ。けれど、その数が尋常ではない。米粒の間を、数千、数万という数の虫が好き勝手に動き回っている。米粒の数を越す勢いだ。彼女は、思わずペットボトル

を床に放り投げていた。

「もう、いや!!」

キャップが緩み、綺麗にワックスがかけられたフローリングに、米粒と虫が散乱する。背筋を悪寒が走った。耐えきれずに後ずさりすれば、背に冷蔵庫が当たる。背後で、何かが潰れる音がした。

「!?!」

慌てて振り向けば、冷蔵庫の壁に潰れたイモ虫が体液を撒き散らしながら張り付いていた。太くて、長い、これが本当にイモ虫かと思いたくなるような大きな茶色いイモ虫だった。腹部に並ぶ、目玉のような模様もしっかりと見える。

「ママ、どうしたの!?!」

半狂乱に陥りながら、彼女は着ていた制服を破り捨てるような勢いで脱ぎ捨てた。慌てて駆け寄って来た娘たちに構っている余裕はない。イヤな予感的中していた。制服の背中に当たる場所には冷蔵庫のイモ虫が垂れ流す体液と同じ色の液体がベツトリと付いてい

る。

「ちょっと、ママ！ どうしちゃったの！？ ねえ！！」

「もういや！！ 耐えられない！！」

すがりついてくる娘の手を振りほどき、彼女は制服をフローリングに投げつける。

「おい、何の騒ぎだ」

廊下へ続くドアが開き、怪訝な顔をした夫が顔を出すのが見えた。

「虫よ！！ 虫がいるの！！」

「はあ？」

心の底から呆れ果てた声でそんな風に呟く博文を押しつけ、彼女はバスルームへと走る。

「気持ち悪い！！ 気持ち悪い！！ きもちわるい！！」

イモ虫の体液が、制服を通りこして自分の肌にまで付着している気がしてならない。このおぞましい感触を消し去るためには、シャワーで洗い流すしかない。

（石鹸で！ 石鹸で洗わないと！！）

冷え切った空気に満ちたバスルームへ服を着たまま駆け込み、彼女は震える手でシャワーのノズルを捻る。温まり切っていない水が溢れだした。構わずに頭からかぶろうとして、シャワーヘッドの先から飛び出してくる白い小さな虫に気付いた。

「どうして！？」

シャワーヘッドを放り出せば、上を向いた穴から噴水のようにウジが飛び出している。狭いバスルームのタイルが、見る間にウジ虫に埋め尽くされようとしていた。

「もう、いやああああ！！」

バスルームから飛び出そうとして、彼女は手を止める。ドアの取っ手の部分には、黒い巨大な毛虫が数匹いた。ドアを開けたくても、開けられない。

「お願い！！ もう、やめてよ！！」

（呪いだわ……！　きつと、そうよ！　誰かが私を呪っているんだわ……！！）

激しく震える指先を何とか伸ばして取っ手に触れようとすると、毛虫が怒ったように頭を持ち上げて威嚇してきた。彼女は反射的に手を引く。そうこうしている間にも、シャワーヘッドから飛び出してくるウジ虫の数はどんどん増えていこうとしていた。

「来ないで！！　来ないでったら！！」

あらん限りの声で叫んだ時、排水溝のフタが重い音を立てて動く。

反射的にそちらの方へ視線を向けた。

「きゃああああ！！」

暗い、まるで井戸の底のような排水溝の中から溢れるように出てきたのは、肥え太った大量の青虫だった。

「……」

霧がかかったように視界が曇る。必死で体重を支えていた膝から力が抜け、虫で埋め尽くされた床が近づいてきた。重いもので頭を

殴られたような衝撃が襲う。あちらこちらで、虫が潰れる気味の悪い音が聞こえてきたのを最後に、彼女は意識を手放していた。

＊

水アカひとつないバスタブに、磨きたてられた鏡、カビが入り込む隙もない真っ白な天井と、明るいピンクの床。シルバーの装飾に入れられたシャンプーとリンス、そしてボディーソープ。ホコリひとつ見当たらない照明に、窓際に置かれたガラス細工と季節の造花。

見慣れた、いつものバスルームだった。

ぼんやりと、彼女はそこに立っていた。何を考えるわけでもなく、何をするわけでもなく、両手を体の横に垂らしたまま、ただそこにいる。

（私、何してるのかしら）

蛇口から一粒の水滴が零れ落ちた。狭いバスルームに、水滴が床を打つ音が反響する。

（お湯、張らないと……）

いつもの習慣で、彼女はバスタブに栓をする。そして、緩慢とした動作で蛇口を捻った。まるで手足が他人のものになってしまったように、やけに重く感じる。

「……」

清水のような綺麗な水が、湯気を上げながら溢れ出て来る。音を立てて、水は勢いよくバスタブに溜まり始めた。

（今、何時かしら……）

最後に時計を見たのはいつだっただろうか。そんなことを考えながら、彼女はふと視線を上げた。そこには、何の変哲もないバスルーム用の鏡がある。鏡の中の自分と目が合った。

「っあああ！！ ああ！！ ああああああ！！」

体中に、虫という虫がたかっている。彼女は慌てて自分の体を見た。しかし、そこには何もいない。再び鏡を見る。鏡の中の自分は、やはり大量の虫にたかられていた。鏡の中の自分の頬を、巨大なイ

モ虫がゆっくりと這って行く。反射的に自分の頬を触る。当然、そこには何もいない。イモ虫を何とか取ろうとするが、そこに存在しないものを取れるはずはない。

（誰よ！ 誰なのよ！ 私に呪いなんてかけているのは……！！）
そう思った時、頬をゾロリと何かが伝っていく感触がした。思わず頬に触れば、何やら粘着質な液体で濡れている。しかし、イモ虫はいない。

「あああああああ！！！」

声にならない悲鳴を上げ、彼女は狂ったように頬を掻きむしる。ヒフが破れて血が滲んだ。爪の間に、こそぎ落ちた肉と血が入り込む。痛いとは思わなかった。それ以上に、鏡の中に映る自分にたかっている虫が取りたくて取りたくて堪らない。

「……い！ ……い！ ……ろよ！」

どこからともなく、聞き慣れた誰かの声が聞こえてきた。

「おい！ 起きろ！！！」

水の中から聞いているように、はつきりしなかった声は、次第に明瞭となり、彼女の耳に届き始める。

「おい、しつかりしろ！」

ぼやけていた視界が澄んで行った。博文が、心配そうな顔で自分を覗き込んでいる。

「あなた……」

「まったく……」

周囲を見渡せば、そこはいつものバスルームだった。床にも天井にも、どこにも虫はいない。鏡を覗き込んでも、蒼白な顔をした自分がいるだけだ。ただ、右の頬には引つ掻いたような傷が深々と残っている。どうやら、夢を見ていたらしい。

「私……どうしちゃったのかしら……」

「それは俺が聞きたいよ。いきなり風呂場に走って行って大声を上げたかと思えば床で倒れてるし。具合でも悪いのか？」

「……そうかも、しれない」

そう言われれば、そうなのかもしれないと思う。体調が悪いのでなければ、あんな経験をするはずはない。それに、虫にたかられる夢を見るなど疲れている証拠だ。もしくは、誰かが呪いをかけているのか……。

（夢、よ。夢に決まってる！ 呪いなんて現実にはあるはずないんだもの！）

自分の考えを否定し、大きく溜め息をついて顔に手を当てる。自分で付けた傷が、ヒリヒリと痛んだ。

「だったらこのままシャワーでも浴びて、さっさと寝てくれ。今日一日お前に振り回されてウンザリだ」

夫の口から出た言葉に、彼女は思わず啞然とした顔を向ける。しかし、博文はそんな彼女を何とも言えない顔で見降ろしたまま、吐き捨てるように言って、バスルームを出て行ってしまった。

「ひどい……」

ひとり残され、彼女は押し殺すように呟いた。

（私はバスルームで倒れてたつていうのに！）

救急車を呼ぶなり、せめて労わるなりしてくれてもいいはずだ。

それなのに、あっさり放り出して「さっさと寝てろ」とは……。自分の扱いはまるで使い捨ての使用人だ。

（ひどいわ！ 頭を打ってたらどうするのよ！ 頭を打った時つてすぐには症状が出ないのよ！ 時間を置いて一気に来るんだから！ 私に何かあったら博文のせいよ！）

どこかで聞きかじった医学情報を引き合いに出しつつ、内心で激しく夫を責め、彼女はシャワーのコックを捻った。服を着たまま頭からお湯を被って、後から後から溢れ出てくる涙を隠す。

（ひどいわ、博文！ 私、あんなにあなたのために尽くしてきたじゃない！！）

結婚生活１２年の代償がこんな扱いなんて、納得できない。近所の目を気にして完璧な主婦であり続け、同僚の目を気にして完璧な社員であり続け、子供たちには理想の母親であるために完璧な母親

であり続けた。それなのに……。

（どうして誰も認めてくれないのよ！！ 私はこんなに頑張っているっていうのに！！）

自分の不幸を呪った。ついでに、自分を幸せにしてくれない博文に言い知れぬ憎しみと怒りを覚える。シャワーに打たれながら、彼女は握りしめた拳に力を込めた。

（みんな、大嫌い……！！）

むし7

「ママ、ママ！ 起きなくていいの？」

「ママー！ 遅刻だよー！」

二人の娘たちの声に意識が覚醒する。浮上した視覚が真っ先に捉えたのは、いつもながら可愛い娘の顔だった。

（やっぱり私に似てよかったわ。プリンセスとビーナスはどんなアイドルより可愛いもの。将来はやっぱり芸能界に入れるべきかしら……）

本気でそんなことを考えていると、娘たちが再び遅刻するよと繰り返す。はっとして時計を見て、彼女は愕然とした。

「え！？ もう7時！？」

慌てて布団から飛び起きた。いつも起きる時間より2時間も遅い。完璧な寝坊だった。

「どうしてもっと早く起こさないの！ 朝ごはんは食べたの！？ 子供に朝食を取らせない母親なんて言われるのは真っ平だわ！！」

パパは！？ もう仕事に行つたの！？」

「パパが起こして来いって言ったの。下で待ってるよ」

姫子の言葉を聞いて、彼女は血が逆流するような錯覚を覚えた。

（早く起こせばいいのに！ これみよがしに子供を起こしに来させるような真似をして！ 寝坊した母親なんて、いい笑い物じゃない！ 嫌味にもほどがあるわ！！）

二人の娘をその場に残し、彼女は自分の寝室を出る。当然のことながら、朝食の支度を丁寧に行っている時間はないし、洗濯物を干す時間もない。

（予定が狂ってばかりだわ！）

洗面所に駆け込み、顔を洗う。いつも通り化粧水と乳液をつけ、パジャマを脱ごうとして手を止めた。

（制服がない！ どうして！？）

いつもならキッチンと畳んで脱衣所に置いてあるはずの制服が、どうしたことが今日は見当たらない。

（そうか！　夕べ、シャワーを浴びてそのまま寝てしまったから洗濯してないんだわ！）

替えの制服は確か寝室のクローゼットの中にあるはず。彼女は慌てて階段を駆け上がった。

「私が具合が悪い時くらい、家事を代わってよ……！」

今ごろ一階のリビングでコーヒーを啜っているだろう夫に向けて、彼女はムダと知りつつそう毒づく。

「遅刻しちゃうわ！」

パジャマを脱ぎすて、防虫剤の匂いが強く染み付いた制服に腕を通した。そして、前のボタンを止めながら階段を駆け下り、リビングに顔を出す。そこには予想通り、新聞を片手にコーヒーを飲んでいる夫と、ピンクのランドセルを背負った娘の姿があった。

「遅刻するぞ。さっさと食べよ」

テーブルの上には一人分のトーストとコーヒーが用意されている。どうやら夫が作ってくれたらしい。

「そんなヒマあるわけじゃない！ プリンセスとビーナスの髪を結んであげないといけないのに！！」

金切り声で叫ぶように言うと、夫だけでなく二人の娘たちまで顔を顰めた。

「今日はもういいよ、ママ。早く行かないと登校班の人たちを待たせちゃうし」

「そうそう！ お姉ちゃんとビーナスはね、いつとも最後なんだよー！」

「何バカなこと言ってるのよ！ そんな頭で学校に行けるはずないでしょ！？ 早くここに座りなさい！！」

自分の可愛い娘たちの髪をセットするために、他人が産んだ薄汚い子供がどれだけ待とうが知ったことではない。姫子と愛美は、生まれた時から天使のように可愛いことから、可愛く装って当然なのだ、と彼女は本気で思っている。

「もう、いいってば！ 早くしないと、みんなが待ってるの！」

「口応えするんじゃないの！ いいから早く座りなさい！！ すぐセツトしてあげるから！！」

姫子の腕を掴んでイスに座らせようとした時、娘の顔に見たこともない怒りが滲む。

「クソババア！ 放せ！！」

姫子の口から出た言葉に、彼女は凍りついた。

（クソババア……？）

娘が彼女の腕を振りほどいて背を向ける。

「クソババア！ クソババア！！」

愛美が姫子の真似をして、その単語を連呼し始めた。

「あ……！！」

その意味をようやく理解した時、彼女は永久凍土のように凍りついていた自分の血液が、灼熱のマグマを孕む火山のように沸騰したのを感じた。

「あ、あんたたち！！ ちょっと待ちなさい！！ 親に向かって

何てことを!!」

捕まえて説教してやらなければ、と思った時には、姫子と愛美はすでにリビングを抜けて玄関へ駆けだしてしまっていた。慌てて追いかけたが、二人は全速力で外へ逃げて行ってしまう。

(なんてことを……!)

やり場のない怒りが全身を支配していた。血が滲むほど、彼女は拳を握りしめる。当然、怒りは収まりそうにない。

「おい、早くしろよ。遅刻す……」

「博文!! どういうことよ!! あんたでしょ!!?」

背後から聞こえてきた夫の声に、火山は爆発し、内部に渦巻いていた溶岩が溢れだした。

「はあ!?!」

「あんたが余計なこと教えたんでしょ!?! 許せない!! どうして娘にあんなこと教えるのよ!! 信じられない!! それでも父親なの!?! どうして私がクソババアなんて言われないとい

けないのよ！！ 私は、あんなにいつも一生懸命がんばってるのに！！ どうしてよ！！ いつの間にあんな子になったの！？

あなたがきちんと子供を構ってないからでしょ！！ 生まれた時は天使のように可愛かったのに！！ いつの間にクソババアなんて言う子になったのよ！！ いつもあんなに可愛くしてあげてるのに！！ 親に感謝する気持ちを持たない子供なんて最低よ！！ そんな子を産んだ覚えはないわ！！ あんたがあんなふうにしたの！？ ねえ、どうなのよ！？ あんたのせいなの！？」

ウンザリした顔をしている博文に向って支離死滅なことを叫んだ拳げ句、胸倉を掴んで激しく揺すった。その手を、面倒くさそうに振り払われる。

「いいから早く支度してくれ。いい加減にしないとこっちまで遅刻する」

「私より仕事が大事なの！？ ホント、最低な男ね！！ そんなんだからプリンセスとビーナスが非行に走るんだわ！！ やっぱ

り、あなたのせいじゃない!!」

「分かったから早くしろ! 会社に遅れる」

「行きたいなら一人で先に行けばいいじゃない!」

「昨日、虫が出たから車を運転したくないと言ったのは誰だよ!」

言われて初めて、彼女は博文が自分を待っている理由に思い至った。しかしながら、だからと言って素直に謝るかと言われれば、当然そんなことはない。

「仕方ないでしょ!? 昨日はいろいろ大変だったんだから!!」

あなたはいいわよ! 仕事に行って帰って来て、ぐうだらしてたら何もしなくてもゴハンが出てくるんだもの! 私はねえ! 仕事から帰って来ても家のことをたくさんしないといけないのよ!

朝ごはんの片づけをして、夕飯を作って、洗濯ものを畳んで、また洗濯して! それでも間に合わないから朝の5時に起きて家事を片づけているのよ! あなたに分かるの!? 少しは私の苦労を労わってよ! 今まで一度だって私のために食事を作ってくれ

たりしたことないじゃない！ 余所の家では休日には旦那さんが夕飯を作ってくれたり、家族でどこかに遊びに行ったりしてるっていうのに！！ あなたときたら、休日は家でぐうだらしてるか、一人で遊びに行っただけ！！ 少しは家族のことも考えなさいよ！！」

自分に非がある場合、それを隠すためにより一層、口車を回転させるのが彼女のパターンである。ちなみに、今朝テーブルの上に用意してくれていたトーストとコーヒーは「見なかった」ことにしてある。

「先に行くぞ。今日は会議なんだ」

「分かったわよ！ すぐ用意すればいいんでしょ！？ すぐ用意しますよ！！ それでいいんでしょ！？ それで満足なのよね、あなたは！！」

「ああ、満足だ」

彼女は足音を立てながら、リビングへ向かった。八当たりをす

るように、思いきりドアを閉める。家中に、激しい音が響き渡った。

*

「おはよう、あっちゃん。今日はお揃いで出勤なのね」

出勤途中の車内で、博文に向ってさんざん金切り声を浴びせかけたせいか、会社に着くころには少しばかり気分が落ち着いていた。晴れやかな秋晴れの下、すがすがしい気持ちで、今日も一日がんばろうと思って工場へ向かったところで、意外な人物に声をかけられた。

「あら、おはようございます、上原さん」

嫌いな社員の一人である上原しのぶだ。ようやく晴れたはずの心が、その顔を見ていると激しく曇って行く。しかし、表面上は決してそれを出さない。表情だけは、まるで30年来の親友に再会した時のように喜びに満ちている。

「あっちゃん、聞いたわよ。昨日はいろいろ大変だったんだって

ね。ウジだったっけ？」

「そうなんですよ。もう気持ちが悪くて、気持ちが悪くて」

もう上原にまで話が回っているらしい。嫌いな人間に失敗を知られることほど屈辱的なことはない。彼女は晴れやかな笑顔の下に、どす黒い怒りを必死に抑え込んだ。

「主任に迎えに来てもらったんだって？ いいわねえ、若い夫婦は。あっちゃんのところは、本当に仲がいいものねえ」

上原は相変わらずだ。染色とパーマで痛んだ髪を、これみよがしに三つ編みにしている。若い子の真似をした化粧も、不快で仕方がない。なぜこんな女が若い男性社員に人気があるのかどれほど考えても分からない。

「そんなことないですよ！ 今朝なんて朝から大ゲンカしましたもん！ ホントにあの人ったら、自分では何もしないくせに私にはああしろ、こうしろって！ それに家庭を顧みないでしょう？ 父親に構ってもらってないから、子供が不安定なんですよ！ 今

日もいきなりキレちゃって！ 朝から手を焼かされましたよ」

二人の娘たちがいきなりあんなことを言い出したのも、すべては家庭を顧みない夫のせいであり、自分のせいではない。通勤途中、本人に向ってさんざん喚いたセリフを、上原に向って再び繰り返した。

「まあ、そうなの。大変だったわねえ。でも主任だって一生懸命じゃない？ あっちゃんの頼みなら何でも聞いてくれるんでしょう？」

「まさか！ そりゃあ、結婚した時はそれなりにワガママを聞いてくれたりしましたけど」

本人の意識の上では「それとなく」他者から見れば「あからさまに」彼女は自分の自慢へと話を持っていく。大嫌いな上原よりも、自分の方が女として勝っていることを証明したくて仕方がないのだ。

「まあ、そうなの。久しく男の人にワガママなんて言ってない

から分らないわ」

「あの人が私のワガママを聞いてくれたのは、本当に結婚式の時だけでしたよ！　だって仏式なんてイヤじゃないですか！　だから海が見える教会がいいって言ったんです。それに、婚約指輪のダイヤがすごく小さくて！　そういうのって腹が立ちませんか？　自分が軽く見られてるような感じで！」

真似したくてもできないだろう、と言葉の裏に込めながら話を続ける。最初から軽く見られて遊ばれて捨てられるだけの上原と、主任の妻に納まる自分は格が違うのだということを見せつける。

「それで大きいダイヤに変えてもらったの？」

「当然ですよ！　私はその時、22歳だったんですよ？　これから先、どんな出会いがあるかも分からないのに、あの人と結婚してあげたんです。それくらいはしてもらわないと割に合いませんよ、ホント」

夫を下げて自慢話に聞こえないようにしているようで、その実

自分の自慢をする。彼女は上原の表情が僅かに変わったのを見て、
すこぶるいい気分になった。

「まあ、そうなの。いいわねえ。それで、具合が悪そうだった静香ちゃんたちが言ってたけど、もう大丈夫なの？　桑田さんも心配してたわよ」

他人に噂されるのがイヤだと言いながら、彼女は自分から噂のネタを提供する。ただ自慢したいだけで、相手よりも勝っていることを確認したいだけだ。その結果、相手が自分をどう思うかまでは考えない。

「もう大丈夫です。きっと疲れが溜まっていたんですよ」

「そうよねえ。仕事をしながら家事をするのは大変なものねえ。経験したことなどないはずなのに、上原は知ったかぶってそう言ってくる。離婚された女が何を偉そうに、と彼女は内心で毒づきながらも、表面上は笑顔をキープし続けた。

「でも上原さんこそ大変でしょう？　おひとりで……」

相手を氣遣っているように見せかけつつ、言葉の裏にイヤミを混ぜ込む。

「氣樂でいいわよ。一人身は」

「そうなんですか？」

あからさまな強がりだ。自分が結婚できないことへの開き直りだと思えない。彼女は勝ち誇った気持ちになった。

「それじゃあ、今日も一日がんばりましょうね。あっちゃん、体には氣を付けてよ」

「はい、がんばりましょう。ありがとうございます」

ちょうど工場内に着いたこともあって、彼女は上原と別れて自分のラインへ向かった。嫌いな上原しのぶに勝ったと実感できた今、今朝の騒動を始め昨日の虫のことがすべてどうでもよくなる。とても良い気分だった。

（上原さんみたいなのと比べられても困るんだけどね。だって私は主任の妻なのよ？ あんな水商売あがりの女なんて、最初から

私に敵うはずないじゃない

むし8

「……と、いうワケなのよ！ 上原さんってば、もう、口では大変ねえ〜なんて言ってるけど、心の中では私のことよく思っていないのが見え見えだと思わない？」

仕事が始まってから数分が経過した。彼女は隣で手を動かす静香に向って、夕べから今朝にかけての出来事をすべて語り終えている。当然、それで話は終わらない。事実報告の後に必ずと言って付け加えられるのは、彼女独自の考察だ。

「だいたい、最近の子供って親が親じゃない？ ウチの子があんな言葉を覚えてきたのは、きっと学校で友達に教えられたからなのよ。親がちゃんとした教育をしてないから、子供が親に向って平気でクソババアとか死ねとか言えるのよ！」

「そうよねえ」

先ほどまで娘たちに「クソババア」という言葉を教えたのは夫の博文だと断定していたが、今は学校の友達ということになっている。

主張に一貫性がないということは、考えもしない。その時そう思っていることが、彼女にとっては決して揺らぐことのない「正しい事実」なのである。

「そう言えば、あっちゃん。もう大丈夫なの？」

ふいに、彼女の言葉が切れた瞬間を見計らって静香がそう聞いてきた。自分のスキについて話の主導権を持って行かれたことに、不快な思いをしないでもないが、相手が静香なのでそこは我慢する。

「昨日、いろいろ大変そうだったじゃない？」

「ああ、もう大丈夫よ。何だか疲れて夢でも見てたみたいなの」

「そう？　だったらいいんだけど。きっと誰かのイタズラよね」

「きっと、そうよ。ホント、嫌になっちゃうわ」

そう言ったところで、彼女は自分に恨みを持つ人間の顔を思い浮かべていく。自分自身が嫌われている、という実感はあった。

「誰かしら。そういうことをする人って」

今ではもう派遣社員の数は少ないが、かつてこの工場が大量の

派遣社員を雇っていた時、何かにつけて嫌味を言っていたら一人、二人と辞めていった。

“ 安倍さんは何人も辞めさせている ”

特定の誰かではなく、会社の雰囲気的にそう言われていることも知っている。ただ、これは彼女に言わせてみれば仕事ができる自分への嫌味に過ぎない。

“ 安倍さんは主任の妻だから、大きな顔をしている ”

博文が主任になった時から、そう言われることは覚悟していた。これもまた、彼女に言わせてみれば主任どころか班長とさえ結婚できなかった女の妬みだ。ましてや、上原しのぶのように離婚された女であれば、なおさらだ。

「心当たりはないの？」

「分かんないわ」

多すぎて分からない。そういうことだった。嫌われているということは注目されていることだ、と彼女は解釈している。自分が他人から嫌われるのは仕事ができるせいであり、主任の妻だからであり、完璧な女だからである。だから同僚たちは自分を妬む。つまり嫌う。

「いい迷惑よねえ」。でも、どうしてあっちゃんには見えて私には見えなかったのかしら」

「それが不思議なのよねえ」

そればかりはどう考えても分からない。その時、彼女の脳裏にひとつの仮定が浮かんだ。

（もしかして、静香さんもグルなんじゃないかしら……？ そうだとしたら、見えてないフリをするのなんて簡単よね）

隣で黙々と作業をしている小柳も同じだ。静香と組んでそこにいる虫を見えていないフリをしていたとすれば、辻褄があう。

（本当の味方がいないなんて、私ってなんて可哀そうなのかしら）

静香も共犯者だ。そう思うと、何だか妙に納得できるものがあった。

（そうよね。イタズラよね。呪いなんてあるはずないんだし）

それに、今日は一匹も虫を見ていない。昨日の出来事は夢であり、誰かのイタズラだということにしておいた。

「そう言えば、小柳さん」

虫の件が一段落ついたところで、彼女はふと昨日、博文が言っていたことを思い出した。

「なんですか？」

声をかけられ、小柳はミシンを動かす手を止めないまま返事をしてきた。彼女の方を振り向きもしない。そういう態度が腹が立つ。呼ばれれば顔くらい上げるべきだ。

「もうすぐ班長なんですってね？ おめでとう。さすが、派遣あがりは違っわね」

「は？ 班長？」

あからさまに滲ませた嫌味には反応せず、小柳が驚いた顔で彼女の顔を見た。どうやら、本人は知らなかったようだ。

「あら、知らないの？ ほら、私のダンナはこの工場の責任者でしょ？ 主任の妻だから。そういう情報はすぐ入ってくるのよ」
「そうですか」

気のない返事をしながら、小柳は再び手元へ視線を落とした。

“安倍さんは、主任の奥さんなんですよね”

“さすが、主任の奥さんとなると違いますね”

彼女の望む言葉は、待てど暮らせど一向に小柳の口から出て

こない。あまりの無関心さに、彼女は唇を噛む。

「すごいわよね。入社１年目で班長に抜擢されるなんて。静香さんでさえ８年かかったのに。でも、そんなに気負うことはないわよ。班長は責任者って言うっても、たいした役職じゃないから」

「へえ」

班長職を虚仮下ろすことは、隣にいる静香をも侮辱することになるのだが、彼女はそこまで深く考えていない。むしろ、一向に関心を示さない小柳が腹立たしくて仕方なかった。

「そう言えば小柳さんの旦那さんは銀行に勤めてるって本当？」

「本当ですけど」

「さすがねえ。もう課長とか？ それとも部長？」

「一般行員です」

「あら、そうなの。入社１年で班長になれるような小柳さんの

旦那さんでしょ？ てっきりもう役職なのかと思ったわ。私の

場合、結婚した時には旦那はもう役職だったんだけど」

「へえ」

小柳の声にはひたすら熱が入っていなかった。

“役職に就いている人に結婚を申し込まれるなんて、すごいです
ね”

“銀行に勤めてるって言うても、私の旦那は一般行員ですし”

求める言葉は返ってこない。

「恋愛結婚だったのよね？ 旦那さんのどこが良かったの？」

「さあ……」

「いいわよねえ。確かまだ19歳でしょ？ よく親が許したわよ。私の時なんて22歳で結婚するって言ったら、親が反対して大変だったんだから。旦那さんは2歳年上だったわよね？ まだ21歳じゃないの。その年でよく家庭を持つ気になったわよ。よほど小柳さんが魅力だったのねえ」

「阿倍さん」

ふいに小柳が顔を上げる。ウンザリしたその顔を見て、ようやく嫌味が通じたかと内心でニヤリとしたのだが、小柳の口から出たのは意外な言葉だった。

「阿倍さん。お願いですから喋ってばかりいないで仕事してください。昨日も一昨日も残業になってるんです。今日は定時に帰りたいんですよ。数字を見てください。もうすでに予

定よりかなり遅れてますよ」

はつきりと言われて、彼女は面食らった。今まで主任の妻である自分に向ってこうもはつきりものを言ってきた者はいない。だが、当然ここで素直に謝る彼女ではない。

「遅れてるのは小柳さんが遅いせいでしょ？」

「遅れないようにがんばってるんです」

ここぞとばかりにその言葉を使うが、小柳は特に顔色を変えない。それどころか、正論を返された。

「でも安陪さんに回せなくて待っている時間の方が長いんです。正社員ですよ。申し訳ないですけど、もうちょっと仕事してくれませんか。会社だって残業代を出したくないって昨日、自分で言ってたでしょ？」

「だから私は残業しないで帰ったじゃないの」

「このラインは3人いないと回せないんです。安倍さんが帰った後、森田主任に残業を頼んだんですよ。安倍さんが帰っ

ても森田主任が残れば同じことですよ？」

ついでに1時間あたりの残業手当は一般社員である彼女より、森田主任の方が高いのは当たり前だ。

「こうやって話してる間にも時間は過ぎてるんです。仕事する気があるなら、早くしてください」

言いながら、小柳が製品を回してきた。そして手元に視線を落とし、再び黙々と作業を開始した。

「あっちゃん、早くしましょ」

思わず固まった彼女の背に、追い打ちをかけるような静香の声がかけられた。会社の先輩であり、主任の妻である彼女を、新入社員の小柳が侮辱したというのに、小柳を咎める様子は全くない。それどころか、彼女を急かすように両手を伸ばして製品を待っている。

（静香さん！ やっぱ小柳とグルなのね！？）

彼女の脳内で、シナプスが結合した。そうとしか考えられ

ない。他の可能性は、微塵も浮かばなかった。

（二人して私を追い出す気なんだわ！ 小柳が班長になると、きっと静香さんは知ってたのよ！ 私にだけ教えないなんて！ サイテー！！）

静香に話をする意志がないと分かれば、もう黙って手を動かすしかない。彼女は苛立ちを隠そうともせず、乱暴な動作で製品に自分の工程を施し始める。その様子を、左隣で小柳が何か言いたそうな顔で見つめていた。

（何よ！ 言いたいことがあるなら言えばいいじゃない！）

彼女は忘れているが、自分たちが扱っている製品はすべて

“売り物”なのである。生産者として、乱暴に扱うことは許されない。当然、乱暴に扱った結果、傷が付けばそれは不良品として処理される。売り物にならない不良品が増えれば、

当然、会社の負担も増える。しかし、今更だが彼女はそんなことまで考えない。

（最悪！ 静香さんと小柳がグルなんて！ だいたい何よ！

旦那が銀行員？ ふざけんじゃないわよ！ なんであんたみ

たいな女がそんなのと結婚できるのよ！ 遊んばかりで家

事はしない！ 仕事もできない女に！ どうせ離婚されるに

決まってるわ！）

きつと、そうなる。

（私が残業しないのは子供のためよ！ あんたみたいに夫婦

で気楽に暮らしてるワケじゃないよ！ 子供には母親が必要

なのよ！ 仕事してるんだし、ムリにでも時間を作らないと

やってけないのよ！ 子供ができたら分かるわ！ 子供がい

ない人に、分かるワケないんだから！）

そくに違いない。

（派遣あがりのくせに調子に乗って！ 今に見てなさいよ！

博文が工場長になったらクビにしてやるんだから！ 私は役

職の妻なのよ！？ あんたみたいなただの一般社員とは違う

んだから！　だいたい静香さんだって！　結婚した人が偶然、博文よりも上だっただけじゃない！　あんたが班長になれたのは仕事ができるからじゃないわ！　部長の妻だからよ！）
そうでなければ、ならない……。

（なんで静香さんが部長の妻なのよ！　私の方が仕事ができるのに！　どうして！？　どうして私は役職になれないの？　間違ってるわ！　主任と部長だったら、そこまで仕事の内容は変わらないはずよ！　博文は私を推薦したはずだわ！　なのはどうして！？　きっと静香さんが部長に何か言ってるんだわ！　だって、主任の妻の方が先に出世したんじゃないか？　あ、格好がつかないもの！　そうに決まってる！　どうしてよ！　どうして私だけ……！　こんなに……こんなにがんばってるっていうのに……！）

彼女は自分が世界中の誰よりも不幸だと感じた。努力も実力も認められず、彼女が必死で上げた成果も他人が持って行

ってしまふ。こんな不幸は、他にない。

(こんな会社……辞めてやるわ！ 私がいなくなつて、みんな苦労すればいいのよ！)

むし9

昼休みになった。午前中、小柳と争いを起こしたことは、すでに大半の社員が知ることとなり、どういうワケか彼女にあからさまな嘲笑の目を向けてくる社員の姿がやたら目についた。

（何よ！ みんな小柳の味方だっていうの！？）

静香と並んで食堂に続く階段を登りながら、彼女はどうしてもなく浮かびあがってくる怒りに唇を噛みしめる。上原しのぶのグループがそういう態度を取ることは分かる。上原たちは彼女を毛嫌いしているのだから、小柳との争いを笑いながら見ているのは理解できる範囲だ。だが、18歳の新入社員グループまでもが彼女をバカにしたような目つきで見ていることが信じられなかった。

（あんなに世話してあげたのに！）

彼女の意識の上では、自分は新入社員にとって模範的な先輩社員であり、仕事も手とり足とり教えて来た。だから当然、自分に

反抗的な態度を取った小柳を除け者にするだろうと思っていたのだが、彼女たちはこちらをチラチラと見ながら小柳を中心に彼女の陰口で盛り上がっているようだ。

（許せない！！）

恩を忘れ、礼儀を知らず、こういった態度を取る若い少女たちには、言い知れぬ憎しみが湧き上がる。

“あのオバサン”

どこからともなく、聞こえないはずの声が聞こえてきた。

“由香里、あのオバサンについてキレたの？ まあ、仕方ないよ

ね。その気持ち、よく分かる”

“ホント、ホント！ ああいうタイプのオバサンって腹立つモン

ねえ！ よく今まで我慢してきたよ”

“何かと仕事中に話しかけてくるんだけどさあ、こっちが聞いてないとキレてるのがミエミエなんだよねえ。つか、ホント他人の悪いところばかり、よく見つけるよね。いつそ感心する”

“そうそう！ 早く帰りたいのにさあ！ 少しは仕事しろよって
ずっと思ってた”

“言いたくはなかったんだけどね。気が付いた時にはもう、口が
開いてた。だって喋ってばかりで、全然ラインが動かないんだ
もん。たまには残業ナシで帰りたいし。”

少女たちの声に、小柳の声が重なった。

“この前もあのオバサンのせいで残業になったんでしょ？ 普通
にやってれば残業ナシで帰れたのに、虫がどうのとか騒ぎまくっ
て遅らせたとか”

“呪われてんじゃないの？”

“そうじゃないの？ だって。しかもあの人、呪われるような性
格してんじゃない。だいたい何よ、虫って。幻覚ってやつ？”

“私も静香さんも見てないし。幻覚でしょ”

小柳の声には、あからさまな嘲りが含まれている。そして、少

女たちの一人が、信じられない一言を放った。

“クスリでもやってんじゃないの？”

麻薬……。幻覚を見るのは麻薬中毒患者に最も顕著に現れる症

状だ。そこにいるはずもない虫を何度も見て騒いだということは、
そう思われても仕方がない。しかし、彼女は自分がそんなモノに
手を出していると疑われ、愕然とした。

“そう言えば知ってる？ あのおバサンの娘の名前！ プリンセ
スとビーナスって言うらしいよ！ アホかったの！”

“マジで！？ あの顔でそんな名前つけられたらマジでヘコむわ、
私！”

“自分が美人だとも思ってたんじゃないの？ いるんだよねえ、
勘違いしたおバサンって！”

“ケータイの写メで子供の顔、見せられてさ、お世辞で可愛いで
すねって言ったの、本気にしてやんの！ バカじゃないのって感
じよ”

“子供の話してる時に、褒めてあげないとキレるでしょ、あの人。適当に聞き流してたらすごい顔されたもん”

“そうそう！　なんかもう、可愛いつて言つて！　私はこんなに素晴らしい母親なのよ！　ってアピールしすぎてウザかった”

“分かる〜！　何かにつけてこう、遠まわしに私を褒めて！　つて強請つてんのよね！　気持ち悪いよね、いい歳して！”

笑い崩れる少女たち。彼女は、悔しさと怒りに震える体を何とか押さえこんで何も聞こえなかったフリをする。

（こんな……）

自然、浮かび上がってくる涙を、必死で堪えた。

（あんたたちに何が分かるって言つたのよ！！）

結婚もせず、子供もおらず、一人で気ままに生きている少女たちが知った風な顔で悪口を言うのが許せない。しかしながら、怒鳴り込んでいくかと言えば、そんなことはない。自分の味方はいないと知っている以上、ケンカを売ることはいらないのだ。

「静香さん、いつもの?」

何でもない顔をして、彼女は隣を歩く静香に問いかけた。

「うん。からあげ弁当」

「取って来るわね。ちょっと待ってて」

「ありがとう」

理不尽さを感じながらも、彼女はいつものように静香と自分の弁当を取りに行った。からあげ弁当とのり弁当を取り、ついでに無料のお茶を紙コップに注いで席に戻る。

「はい、お待たせ」

「どうも」

静香も表面上はいつも通りだ。その心の中で何を考えているのかは分からない。けれど今は彼女を拒絶するつもりはないらしい。何だかんだ言っても、彼女にとって静香はこの会社で唯一の友人と呼べる存在だ。心の中では嫌いだと思っけていても、一人になる勇氣はない。おそらく静香も同じなのだろう。女同士の付き合い

いなんて、言ってしまえばそんなものだ。

「おなかすいた〜！ 今朝、朝ごはん食べてないんだもの！」

さっそく、真っ白なごはんを箸で取って口元に運ぶ。

「そうなの？ 体に悪いわよ、あっちゃ……きゃああああー！」

静香の言葉に、悲鳴が重なった。

「何？ どうしたの、静香さん？」

咀嚼しながら、彼女はただならぬ様子でその場を飛びのいた静香に問いかけた。突然の悲鳴に、食堂にいた社員たちが何事かと集まり始める。

「あ、あ、あっちゃん……！ む、むし……！ むし……！！！」

虫、という言葉に背筋がゾツとした。同時に、集まって来ていた社員たちも口々に「虫」という言葉を叫び出す。少女のうち何人かは、静香と同じように悲鳴を上げてそこから飛びのき始めていた。

「何よ！ 何なの！？」

「あんた！ 弁当！ 弁当を見るよ！！」

年配の男が目を見開いて自分の手元にある弁当を指差す。はっとして視線を落とせば、ついさっきまで「ごはん」と思っていた弁当の米が、大量の虫に変わっていた。

「いやあああああああ！！」

ようやく彼女も事態を理解した。悲鳴を上げ、弁当を置いた長机から離れる。

「何よ！ 何よ、これ！！」

5センチほどの細長い虫には、ところどころに鋭く長い毛が生えていた。頭の先だけ焦げ茶色をしているが、全体的に薄いクリーム色をしている。互いの体を絡め合うように、発泡スチロールの中を泳ぎ回っている様子が、何とも気味悪くて仕方ない。その時、ふと口の中に違和感を覚えた。

「うえ……！！」

未だに飲み込めずにいた「ごはん」が、何やら口の中で動いて

いる。頬の肉が、内側から刺されるような感触がした。舌の上で、何か小さなものが無数に蠢きまわっている。

「おえっ！！」

反射的に、彼女は口に含んでいた「ごはん」を吐き出していた。

予想通り、彼女の口から出てきたのは「虫」だった。

「あんた、虫を喰ったのかよ！」

傍にいた社員たちが、一斉に彼女から距離を取る。その中には、静香の姿も含まれていた。吐き気がする。どうにも、堪えられそうにない。

「おい、これ、どうすんだよ！ 誰か始末しろよ！」

年配の男が叫ぶ声を聞きながら、彼女はトイレに向って走り出していた。

*

結局、彼女は昼休みのほとんどをトイレで過ごすこととなった。もともと空っぽの胃袋には、吐く物など何も残っておらず、彼女は

便器に向ってひたすら胃液と唾液だけを吐き出し続けた。

（虫……気持ち悪い……！！）

口の中に虫たちの感触が未だに残っている。洗面台でどれだけ口を漱いでも、いっこうに気持ちの悪い感触は無くならない。体が震える。背筋がぞつとする。何もかもが、気持ち悪くて仕方がない。

（仕事に、戻らないと……！！）

昼休みの終了を告げるチャイムが鳴り響いていた。工場に戻らなくてはならない。しかし。

（今日は、もうムリだわ……！！）

こんな気持ちで、働けるはずはない。どう考えてもムリだ。あんなに大量の虫を見せられた拳句に、口の中に含んでいたのだ。まともな精神状態でいられるはずはない。帰って休もう、と彼女は決めた。

（森田主任に、早退の報告をしないと……）

この時間なら工場内にいるはずだ。さすがに黙って帰るようなこ

とはしない。早退するならば、その旨を役職に報告するのは義務である。彼女は、ふらつく足取りで食堂の横にあるトイレを後にした。

（誰も心配して様子を見に来ないなんて……！）

食堂を飛び出してから30分近く。様子を見に来るところか、普通にトイレを利用しにくる者さえいない。昼休みはこった返すのが女子トイレの常だ。これは、トイレに用がある者はわざわざ一階にあるトイレを使っているとした考えられない。全員が、彼女を意図的に避けている結果だ。

（みんな……みんな、大っきらい！！）

静香にしろ、18歳の新入社員グループにしろ、彼女から貰った恩は大きいはずだ。それにも拘らず、いざ彼女の立場が傾けば誰もが一斉に逃げていく。手を差し伸べようとする者はいない。声をかけようとする者もない。理不尽だと思う。

（森田主任、どこにいるのかしら）

何とか階段を降り、彼女は工場に向かう。そこはフォークリフト

やミシンが動く雑音に満たされ、その中を作業員たちが一心不乱に働いていた。彼女にとって、16年間、毎日のように見続けてきた「いつもの工場」がそこにある。ただ、そこに彼女が足を踏み入れた瞬間、日常が瓦解した。

「ちょっと！！ 何よ、あれ！！」

「きゃああああ！！」

「来ないで！！」

工場内を進んでいた彼女に目を止めた作業員たちから、一斉に悲鳴と拒絶が漏れる。

「安倍さん！！ 虫が！！」

「あっちゃん！！ 早く、早く取りなさい！！」

虫、という言葉ですべてを理解した。しかし、慌てて視線を巡らせても、虫の姿はどこにも見えない。

「どこ！！？ どこにいのよ！！？」

「どっつて……！！」

見えない。どこにいるのか分からない。けれど周囲の反応を見る限り、彼女の周囲に虫がいるのは確かであるらしい。それも、顔を見た瞬間に悲鳴を上げられるほどなのだから、よほどの数だ。全身を虫にたかられた自分……。タベ、バスルームで見た夢の光景が思い浮かぶ。

「あの人、アタマおかしいんじゃないの!？」

どこかで誰かがそう言った。

「おい、どうしたんだ」

騒ぎを聞きつけて森田主任がやってくる。彼女の顔を見るなり、

“あの”森田主任までもが顔色を変えて一歩、後じさりした。

「安倍、お前……」

「何なのよ!？ 虫がいるの!？ どこに!？ 早く取ってよ!!」

私には見えないのよ!!」

無意味に手を振り回しながら、彼女は自分の体についていると思われる虫を探し求める。見えない。どこにも虫などいない。周囲に

いる人間がなぜこんなに大騒ぎするのか分からなかった。

「ちょっと、じっとしてろ！」

森田主任が歩み寄って来る。言われた通り、彼女は動きを止めた。

「虫がいるの！？ 早く取ってよ！！！」

「分かったから！」

彼の手が頭に伸びてくる。そして、ゴミを払うように頭の上で手を動かした。

「いやあああ！！！」

床に、無数のウジが散らばって行く。一匹、二匹ではない。森田主任が手を動かす度に、数えきれない数のウジが床に落ちてのた打ち回っている。森田主任の手が頬を払えば、床の上に巨大な毛虫が落下した。遠巻きに様子を見ている作業員たちから、悲鳴が漏れる。

「早く！ 早くしてよ！！ まだなの！？」

「ちょっと待て！」

森田主任の声に焦りが浮かぶ。どうやら払っても払っても、虫は

湧き出てくるらしい。

「おい、何の騒ぎなんだ!？」

人混みをかきわけてやってきたのは、彼女の夫である博文だった。

「お前…… いったい……」

博文は彼女を一目見るなり顔色を変える。12年という歳月を共に過ごし、二人の子供まで儲けたはずの妻から、一步、二歩と距離を取っていった。

(博文……! あなたまで……!)

そんな夫の反応を見て、彼女は絶望より先に怒りを感じた。

(あんなに尽くしてきたのに……! あなたのために私はあんなに犠牲を払ってきたのに……!!)

彼女の内に、どす黒い感情が渦を巻く。

むし10

許せなかった。

自分を幸せにしてくれなかった博文が。

自分より幸せな小柳が。

自分よりも女として生きている上原が。

自分よりも上にいる静香が。

自分よりも若い少女たちが。

自分には振り向きもしない若い男たちが。

自分を見下す男たちが。

自分を笑い物にする女たちが。

自分を認めない役職たちが。

許せない。

博文は彼女の“愛情”を「無視」する。

娘たちは彼女の“献身”を「無視」する。

小柳は彼女の“プライド”を「無視」する。

上原は彼女の“顕示欲”を「無視」する。

静香は彼女の“努力”を「無視」する。

若い少女たちは彼女の“苦勞”を「無視」する。

若い男たちは彼女の“女”を「無視」する。

作業員たちは彼女の“貢献”を「無視」する。

役職たちは彼女の“実力”を「無視」する。

誰もが彼女を「無視」する。

（だから、みんな……死ねばいいんだ……！！）

＊

その時、工場内で安倍を見ていた作業員たちは、安倍の体が「崩壊」

する様を目撃した。

「きゃあああああああー!!」

「なんなんだ!？」

「どうなってんだよ!!」

「おい、警察を……!!」

「救急車……!!」

作業員たちから、叫び声が迸る。

「虫が……!!」

彼らがそれまで「安倍」と思っていたはずの女の顔から、ボロボロと

音を立てながら巨大なイモ虫が次から次へと床に落ちる。虚ろに開かれ

た口から洪水のように青虫が溢れ出て、眼球からは止めどなくウジ虫が

零れ出る。鼻の穴、耳の穴、制服の袖や襟からも、ありとあらゆる虫が

這い出し、傍にいた森田主任を一瞬で覆い尽くした。

「いやあああああ!!」

「主任ー!!」

「誰か!! 誰か助けてよ!!」

虫に覆われた森田主任の体が床に転げ、のた打ち回る。苦悶の声を上

げながら虫に満ちた床を二転、三転し、やがて動かなくなってしまう。

「ちょっと! 誰か!! 誰か、取ってよ!!」

「気持ち悪い!! 気持ち悪い!!」

「いやああああ!! 虫が入った!!」

阿倍の体から湧き出る虫たちが、その場にいた作業員たちに次々に襲

いかかる。全身を虫にたかれ、森田主任と同じように呼吸器官を塞が

れて上原しのぶは窒息死した。また、伊藤部長は耳から大量のウジが脳

内に侵入し、その場で痙攣しながら死んでいった。

「外へ出るー!!」

「逃げろー!!」

100人近い作業員たちが一斉に小さな非常口を目指して押し寄せる。

静かだった工場内は、今や恐慌状態に包まれ、誰もが我先に逃げようと

目の色を変えた。

「痛い！ 止めて!!」

「早くしろ!! 早く行けー!!」

「きゃあああ!!」

「止めて！ 押さないでよ!!」

交差する脚につまづき、年配の作業員が転倒する。桑田、だった。

しかし、その場にいた誰もがそれに気付かず、出口へ向けて殺到していた。起きあがろうとした桑田の背中を、18歳グループの少女たちが次々に踏んでいく。数人の体重が一気に押し掛かり、桑田は圧死した。

「いやああああ！！ 誰か助けて！！ 助けてー！！」

真っ白なウジの集団に襲いかかられているのは、静香である。彼女は全身のありとあらゆる場所をウジにたかられ、ついには口や鼻をも塞がれる。誰も助けようとしない。助けたくても、助けられない。助けようとすれば、自分が虫にたかられることが分かっているからだ。

「うわああああ！！」

非常口付近にいた若い男性社員が数人、悲鳴を上げながら体を掻きまわす。服の中に入った虫を取ろうと無我夢中で制服を脱ぎすてた。その体には、無数の毛虫がたかっている。彼らの皮膚は真っ赤に腫れ上がり、そのうちの何人かがショック症状を呈してその場に倒れる。その体の上を、多人数が踏みつけていった。

「もう、止せ！！ もう止めるー！！」

未だその体から大量の虫を吹き出している妻だった女に向かって叫ぶのは、安倍主任、安倍博文である。

「もう止せ！！ 頼むから！！」

彼の体にも、大量の虫がたかっている。それでも、博文は叫ぶことを止めなかった。空気を吸い込もうと開いた口、塞ぐことのできない鼻から虫が次々に入り込んでくる。咽かえり、彼はその場で嘔吐した。

消化中の胃の内容物とともに、飲み込んでしまったらしいウジや青虫が口から溢れ出てくる。激しく咳きこみ、彼は思わず虫だらけの床に手をついた。潰れた虫の体液が触れる。その手を伝って、虫たちが彼の体を這いあがり始めた。

「おい……!!」

払っても払っても、虫たちは彼の体から離れない。頭の中がむず痒いのは、大量の虫が頭皮の上を這いまわっているせいだ。博文は鼻と口から空気を一気に吐き出し、潜り込んで来ようとする虫を一時的に吹き飛ばした。

「おい！ 聞こえてないのか！」

妻に向かって叫ぶが、もちろん答えなど返ってこない。意を決して、博文は虫が湧きだす妻に向かって駆け出した。

「おい！ もう止めてくれ！！」

太く、長い、巨大な毛虫に躊躇しながらも、博文は彼女の肩を掴んで揺さぶる。顔面にたかっていたイモ虫が数匹、ボロリと落下した。

「……………！！」

イモ虫が剥がれた彼女の目を見て、博文は絶句した。

「そんな……………まさか……………！！」

つい先ほどまで確かに眼球があつたはずの場所には、大きな空洞がある。毎日のように手入れしていたはずの肌も、腐つたようなどす黒い色に変化し、虫に食い破られ、かつての面影は全く残っていないかった。考えるまでもない。妻だった女は、すでに死者なのだ。

「うわ……………！！」

初めて見た人間の死体に、それが妻であつたことを忘れ、博文は思わず後ずさりしていた。しかし、足元に纏わりつく巨大なイモ虫が、それを止めた。

「くそ！！！！」

イモ虫たちは、まるで博文を妻から離さないように、堅くしがみついている。踏んでも、蹴っても、一匹が死ねば別の一匹が纏わりついて、彼がその場を逃げることを許そうとしなかった。そして、その中の一匹が、博文の体を這い上り始めた。

「っー!!」

ゆっくりと体を這い上ったイモ虫が、博文の首にその巨体を巻き付ける。博文には、虫たちがまるで妻の化身のように思えた。

「うー!!」

首に巻き付くイモ虫の数が徐々に増えていく。その間に、足元から登って来たウジ虫や青虫たちが口や鼻に入り込んだ。白目を剥く直前、

博文は死体であるはずの妻が、微かに笑ったのを見た気がした……。

薄れていく意識の中で、博文は妻と過ごした12年の結婚生活のことを思い出していた。

(どこで、間違っただ……?)

かつての妻は明るい性格で、それでいて夫を立てる理想的な女だったと思う。その性格に惚れこんで、結婚した。それなのに、いつの間にか妻はあんな女になってしまった。

（ちゃんと話を聞いてやらなかったからか……？ それともお前のワガママをすべて聞いてやらなかったからか……？）

今となっても、博文には理由が分からない。自分は自分なりに、夫としての務めを果たしてきたつもりだ。同じ会社で働く以上、聞いてやれるワガママと、そうでないものもあった。それに、家庭のことは口を出すなと本人から言われたから、そうしただけだ。

（なんでなんだよ……？）

結局、理由には思い至らないまま、博文は意識を完全に閉ざしてしまった。

彼女は、自分の思い通りにならない世の中を憎んだ。自分が幸せでないのは、周囲にいる人間のせいであり、社会のせいだと思い込んで

いた。

そして最後まで、幸せである人間は、自らが幸せになろうとした結果であることを知らなかった。

彼女は「呪われて」いたのではない。

彼女は「呪って」いたのだ。

その代償に、自らの体を虫に食われただけの話だ。

そして望み通り、最も憎むべき人間を道連れに、自らも人生の幕を閉じていった……。

終劇

むし10（後書き）

お疲れ様でした。ここまで読んでくださって本当にありがとうございます。無事に完結いたしました。

ここで、ちょっとホラーなことを書かせていただきます。

この話に登場する「彼女」ですが、実在の人物をモデルにしています。

もちろん「安部」さんではありません！！

世の中には「彼女」以上に衝撃的な方がいらつしやるのかもしれませんが。ただ、ハンマーヘッドが以前、勤務先で出会ったオバサ……いえ、先輩社員は、これまで出会って話をしてきたどんな女性よりも、まさしく「衝撃的」でした。ここは敢えて、衝撃の「人間」ではなく「女性」と限定させていただきます。

これはネタにするしかない！ と意気込んだのですが……なにぶん、普通の人には想像もつかないようなシナプスの繋がりをする女性ですので……心情の描写には本当に苦労させられました。

何を考えていたのか、未だに分かりません（泣）

なにはともあれ、ここまでお付き合いいただき、本当にありがとうございます。よろしければ、感想などお聞かせください。こんな衝撃のオバサンを知っている！なんて意見もぜひ（笑）

それでは、失礼いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7968i/>

むし

2010年10月9日16時46分発行